柏原市文化財発掘調査概報1982-1

片山廃寺塔跡発掘調査概報

1983

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は大阪南東部に位置し、大和川をはさんで旧中河内郡の柏原町と南河内郡の国分町の合併により、昭和33年10月市制をしいたもので、古くは、河内国の大県郡、志紀郡、安宿郡と称される地域であった。地形的には奈良盆地の水を集めて、亀の瀬峡谷から大阪平野に流出する大和川の谷口に位置し、生駒山地の分水嶺をもって奈良県と接している。

日本の歴史の中で、宗教を主原因とする戦いをあげるならば、蘇我・物部氏の戦いがまずあげられる。この戦いは、蘇我氏の勝利、仏教崇拝ということで幕がおろされた。これ以後、主戦場となった河内の地では、船橋廃寺を嚆矢として、7世紀代になると、有力氏族による仏教寺院が続々と建立されることになった。

柏原市域には、船橋廃寺をはじめとして、白鳳期を経て、天平期の国分寺・国分尼寺までの古代寺院跡18寺という多数があげられている。

なかでも、田辺廃寺は範囲確認調査の後、国の史跡指定を受けており、また、国分寺塔跡、鳥坂寺金堂跡では凝灰岩の切石による壇上積基壇が非常に遺存状況の良い状態で確認されている。

片山廃寺の塔跡は凝灰岩の切石による壇上積基壇で、瓦積による後世の補修も認められるほど遺存状況の良いものである。保存を計るため、地元の了解のもとに、史跡の指定を受けてよいものである。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1．本書は柏原市教育委員会が、柏原市水道局の水道管埋設に伴って実施した柏原市片山町所在、片山廃寺塔跡の緊急発掘調査概要報告書である。

1．発掘調査は昭和57年４月１日から27日まで実施した。

1．発掘調査は柏原市教育委員会　社会教育課文化財担当嘱託　安村俊史が担当した。

1．遺物整理は安村俊史を中心として、米谷厚子・大塚淳子の協力をえた。

1．本書の編集は安村俊史が行ない、執筆は第１章―１を竹下　賢、その他全文を安村俊史が担当し、付章は奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託　奥田　尚氏に依頼した。

1．調査の実施、本書の作成に際して、奈良国立文化財研究所、大阪府教育委員会　文化財保護課、四天王寺国際仏教大学　藤沢一夫教授、奈良大学　水野正好教授のほか、多数の方々に指導、助言を賜った。

1．調査協力者は下記の通りである。

石田　博	北野　重	花田勝広	山内　都
苅野絹子	石田成年	上田　睦	佐藤　尚
竹下彰子	蜂谷直子	麻　栄三郎	朝田行雄
井上岩次郎	奥野　清	川端長三郎	谷口鉄治
道簱甚蔵	森口喜信	池田ナラギク	高橋いね子
寺内信子	村口ゆき子		

目　　次

第１章　調査経過……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査日誌抄……1
第２章　位置と環境……3
　１．周辺の遺跡……3
　２．過去の研究……3
第３章　調査結果……5
　１．層序……5
　２．遺構……6
　３．遺物……10
第４章　まとめ……23
付章　岩石種とその産地……31

第1章　調　査　経　過

1．調査に至る経過

柏原市水道局は、柏原市片山町11番の地に、既設送水管として、旧来の石綿管が布設されていたが、この管が老朽化したため、漏水、破損事故による修理工事が相次ぎ、市民生活に支障を来すこととともなるので、送水管を新しく布設する工事を計画した。

この新管布設工事の計画路線が片山町の薬師堂に沿っていた。この薬師堂は大正９年に建設されたものであるが、この建設に伴い予定地内に存した礎石を移動させて、堂前に南北一列に並べられている。その中に巨大な塔心礎があり、塔の存在が知られ、『柏原市史』では、塔心礎の規模から、壮大な五重塔であったと推察されていた。

柏原市水道局は、昭和57年１月27日付けで、文化財保護法、第57条の３、にもとづく土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書を提出するとともに、柏原市教育委員会と事前協議を重ねた。この結果、新管布設予定ラインを遺構に当たらない地域に変更することを前提とすることで合意に達した。

柏原市教育委員会は協議の結果をもとに、柏原市水道局から調査費57万円で発掘調査の依頼を受け、昭和57年４月１日より調査に着手したが 旬日の後には、遺存状況の非常に良好な凝灰岩基壇が検出された。遺構の全容については遺構検出範囲が試掘溝の幅（0.6ｍ）では考察しえないものであった。このため、柏原市教育委員会は、遺構の全容を幾分でも把握するため大阪府教育委員会　文化財保護課に指導を求めたところ、調査範囲を拡張するよう指示があった。

遺構が検出された場合、遺構に当たらないように、新ルートを確保することは調査の前提でもあり、調査範囲の拡張について柏原市水道局と協議するとともに、遺構の保存上、昭和57年４月13日以後、昭和57年４月27日までの調査を国庫補助事業緊急発掘調査費で充当することとした。調査範囲の拡張、調査期間の延長について、柏原市水道局施設係　笹谷幸裕　硲田修示および地元の薬師講中に快よく協力いただいた。

2．調査日誌抄

４月１日

水道管埋設予定部分に南北方向のトレンチを設定し、調査を開始。屋瓦が多数出土する。

４月６日

一部凝灰岩切石から成る瓦積み基壇の南辺を確認。基壇の残存状態、およびその範囲確認のため、東・西・北にトレンチを拡張。

4月8日

トレンチ北端で基壇西辺の凝灰岩地覆石列を確認。基壇の軸がかなり東に偏していることが判明。南面階段が比較的良好な状態で残存していることを確認。

4月10日

基壇北西隅の地覆石を確認。基壇の規模がほぼ判明する。

4月12日

基壇西縁地覆石列の延長を確認。西面階段は残らないが、地覆石が途切れ、自然石になっている部分があり、西面階段の規模がほぼ判明する。

4月15日

南面階段の全容確認のため、トレンチを拡張。

4月16日

南面階段周辺に、屋瓦・塼が多数堆積していることを確認。基壇崩壊時の状況を留めていると判断し、階段西半のみを掘削し、東半をその状態で保存することにする。

連日、研究者・技師が見学に来られる。

4月19日

基壇の平面・立面実測開始。

4月21日

礎石抜き取り跡を二箇所で最終的に確認。

4月24日

現地説明会開催。

4月26日

基壇上の土器溜め状遺構を掘削。

基壇全面に砂をかぶせ、埋め戻し開始。水道管は基壇を迂回して設置する。

4月27日

埋め戻し終了。水道管埋設終了。

発掘調査終了。

第2章　位置と環境

1．周辺の遺跡（図1）

片山廃寺は玉手山丘陵北端に存在し、北に大和川、西に石川を望み、大阪平野を一望できる絶好の立地条件を備えている。

丘陵上では、サヌカイト製の旧石器が採集されており、歴史の古さを物語っている。丘陵北側の低地には、縄文時代から中世まで続く船橋遺跡、西側には国府遺跡などが存在する。玉手山丘陵上でも、玉手山6号墳周辺で弥生時代の竪穴住居址が確認され、銅鏃などが出土している。銅鐸の出土も伝えられている。古墳時代になると、前期の大古墳群として著名な玉手山古墳群が存在し、後期には安福寺横穴群、玉手山東横穴群が出現する。また、片山廃寺西側の道路工事の際に円筒埴輪列が見られたということであり、三角板鋲留短甲形埴輪が出土している(1)ほか、最近の調査で、片山廃寺周辺から、中期全般にわたる円筒埴輪が出土している。歴史時代に入ると、丘陵周辺で7世紀後葉から8世紀代の遺物が多数出土しており、片山廃寺との関連を考えなければならない。また、玉手廃寺跡の存在も報告されている(2)。このように、玉手山丘陵北端では、綿々と人間の生活が営まれてきた。それは、交通の要地としての立地の素晴らしさに大きな原因があると思われる。玉手山丘陵北端に存在した片山廃寺は、大和川・石川を渡航する人々に、その堂々たる姿を見せていたことであろう。

註

（1）『柏原市史』第二巻・本編（Ⅰ）1973、第四巻・史料編（Ⅰ）1975

（2）野上丈助「玉手廃寺跡試掘調査概要」『節香仙』第3号　1972

2．過去の研究

片山町薬師堂の前庭に、巨大な塔心礎を含む礎石5個が存在することは、古くから知られていた。これらの礎石は大正時代に移動されており、それ以前の配置から、藤沢一夫氏が中の間20尺、脇の間15尺、一辺長50尺という巨大な塔を想定されている(1)。また、山本昭氏が地形から四天王寺式伽藍配置と復元され(2)、藤沢氏は地籍図から、方一町の寺域をもち、この塔跡を西塔とする薬師寺式伽藍配置を復元され、その創建時期は、藤原宮跡出土軒丸瓦と同笵の複弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから白鳳期と考えられた(3)。そして、この寺院を建立した氏族については、安宿郡尾張郷という地名から尾張氏と考える説(藤沢・山本)、塔跡の北に春日神社が存在することから、藤原氏との関係を考える説(藤沢)、さらには鳥取氏と考える説（山本）も提唱されている。以上のような研究成果をもとに、今回の調査を実施した。

註

（1）藤沢一夫「柏原市域の古代寺院とその性格」『柏原市史』第四巻・史料編（Ⅰ）1975

（2）山本昭「古代寺院跡」『柏原市史』第二巻・本編（Ⅰ）1973

山本昭「考古資料」『柏原市史』第四巻・史料編（Ⅰ）1975

（3）藤沢一夫「河内片山廃寺々地と伽藍配置」『大阪文化誌』11号　1978

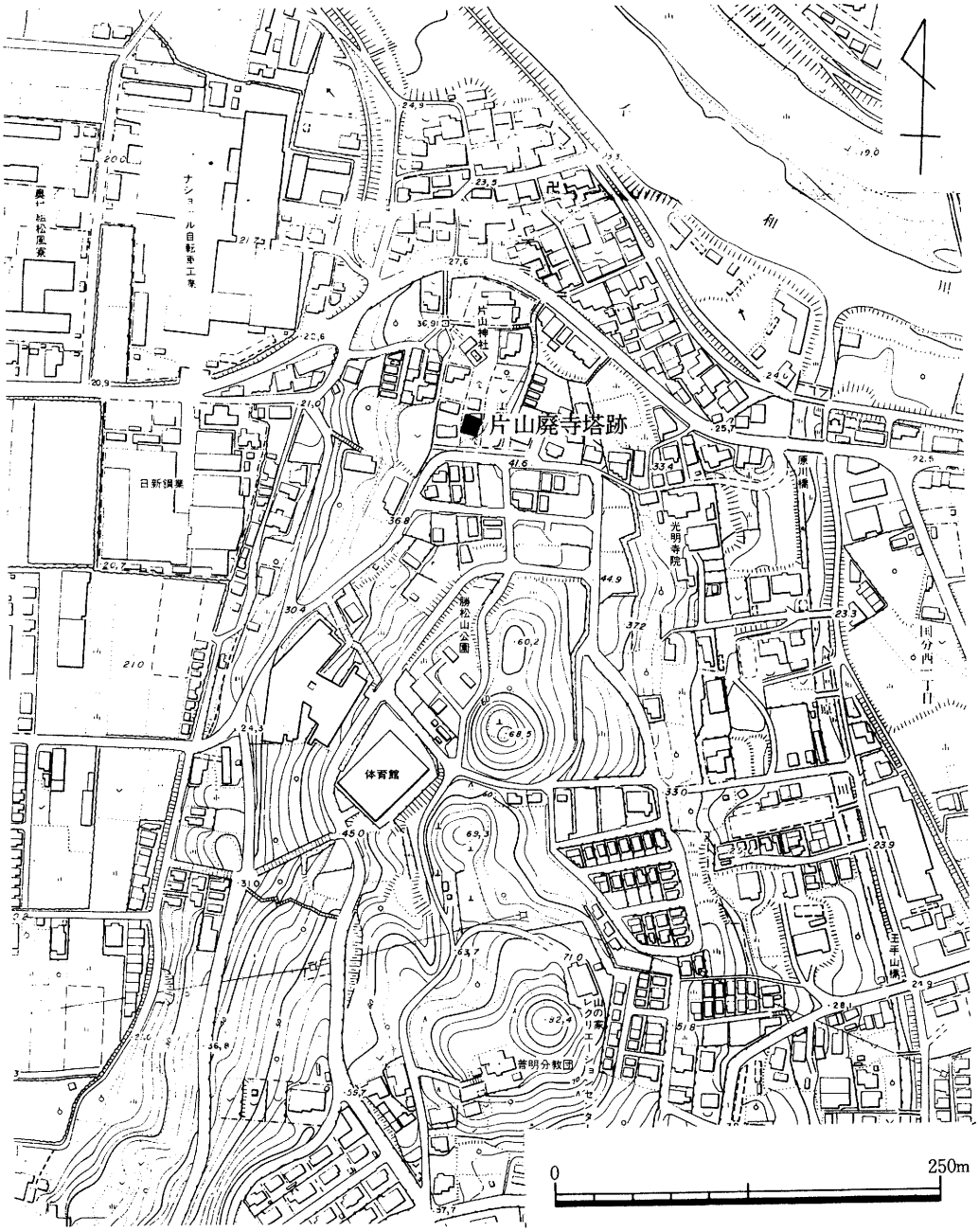


図1　片山廃寺塔跡位置図

第3章　調　査　結　果

1．層序（図3）

塔基壇は最も残存状態の良好な部分で、G．L．－20cm、T．P．38.0mで検出されたが、かなりの削平を受けているようであり、本来の基壇面は現地表面近くであったと思える。基壇南側では、地山上に約50cmの厚さで瓦を多量に含む暗灰色砂質土が堆積し、その上に、やはり瓦を含む黄褐色砂質土、褐色砂質土が全面に堆積し、現地表面となる。暗灰色砂質土は基壇崩壊直

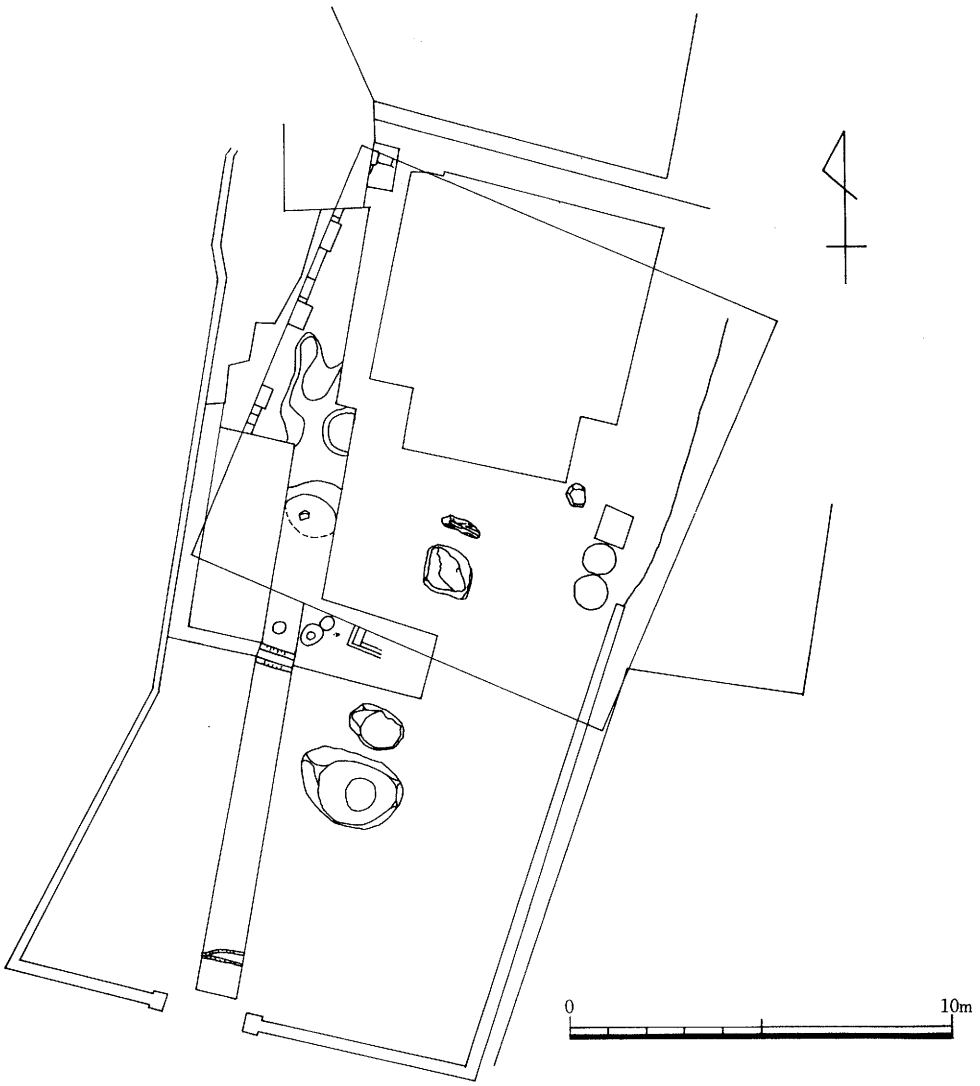


図2　調査地区全体図

後と考えられるが、他の二層は時期決定が困難である。三層はいずれも人為的な整地層と考えられ、塔廃絶後、数回にわたる削平、整地が繰り返され、今日に至っているようである。

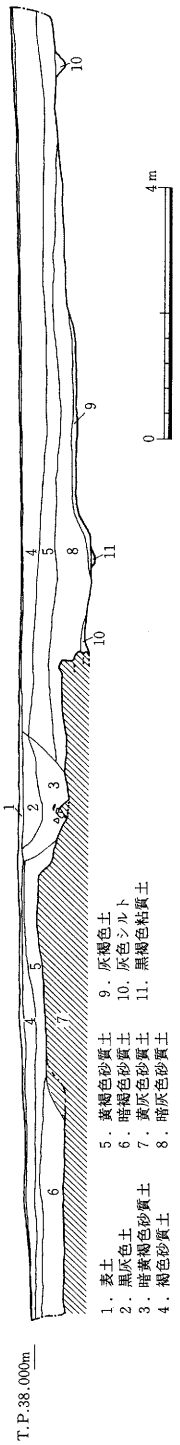


図3 土層図

2．遺構

① 塔基壇（図4・図版一～三）

塔基壇南辺は非常に残存状態が良好で、約37cmの高さを留める。また、西辺の凝灰岩地覆石、北西隅部分の地覆石が確認されたため、基壇一辺長11.87m（1尺を30cmとすると約39.5尺）と復元できた。また、塔の主軸は予想されていた南北方向の主軸とは異なり、磁北から約22°東へ偏している。基壇は二層から成っており、下層は土師器細片を含む厚さ約40cmの暗灰褐色土、上層は無遺物の厚さ30cm以上の黄灰色砂質土であり、いずれも叩き締められているようである。

基壇の構造は、南辺でのみ確認され、瓦積み部分と凝灰岩壇上積み部分が見られる。地覆石・階段が、共に凝灰岩切石である点から考えると、創建頭初は凝灰岩切石による壇上積みであり、後に瓦積みに補修されたと考えられる。壇上積みの構築法は、まず約10cm地山面を掘り下げ、延石としての自然石を敷き、灰色シルトで埋めている。自然石はこぶし大から人頭大である。灰色シルト上に、上面を平滑に仕上げた幅約20cm、厚さ約18cmの凝灰岩切石を敷いて地覆石としているが、長さは一定しない。北西隅部分はやや大きい地覆石を使用しており、西辺でも階段部分、および北西隅から2.6mの位置の地覆石はやや大きい。西階段と北西隅の中間地点であるこの位置には、束石が立っていたのではないだろうか。南辺では、地覆石上に羽目石が一部残存するが、上面が破砕されており、基壇高や葛石等の状態は復元できない。そして、大部分が凝灰岩地覆石上に半截平瓦を積み重ねた瓦積基壇となっている。基壇に使用されている平瓦は、全てⅨ類（平瓦の項参照）であり、外見上の美観のために、意識的に同類の瓦を使用したものと思える。瓦積みは南側へやや前傾している。土圧によるためかもしれないが、塔が南側へ倒れた可能性も考えられる。

また、基壇上には化粧塼が敷かれていたようであり、ほとんどの塼に焼成前に文字が刻まれている。

現在、薬師堂前庭に存在する礎石は現位置を留めていないが、脇柱の礎石抜き取り跡が、二ヶ所で確認された。抜き取り跡の一つは、脇

凝灰岩

土器溜

土器溜

T.P.38.000m

T.P.38.000m

0 2m

図 4　塔基壇実測図

柱の南西隅に当たるもので、直径約 190cm、深さ約35cm、根石と思える石が数個残存した。今一つの抜き取り跡は、西辺脇柱の南から二個めに当たるものであり、花崗岩が数個に割れた状態で埋まっていた。おそらく、破砕された礎石の破片がそのまま残存したものと思える。いずれも表土直下から抜き取りの掘り方が掘られており、抜き取られた時期が新しいことがわかる。南西隅の抜き取り跡中心から基壇縁辺まで2.54～2.56m、抜き取り跡の心々距離は2.24mを計る。基壇一辺長が 11.87m（39.5尺）であるので、塔の規模を復元すると、2.25m（ 7.5尺）等間隔の柱間とするのが妥当と思われる。

階段は南辺と西辺で確認された。南階段は良好な状態であったため、規模・構造を確認することに留め、西半のみ完掘、東半は掘り下げなかった。階段袖石を含めた幅 196cm、残存高51cm、踏段の幅20cm、一段の高さ15cmである。基壇残存面、礎石抜き取り跡の高さから復元すると、基壇高はＴ.Ｐ.38.1m前後と考えられ、階段はさらに二段存在し、地覆石を含めて五段であったと考えられる。すると、階段が基壇内にやや切り込んだ状態が復元され、高井田廃寺金堂基壇と同様な基壇であったと考えられる。

西階段は残存状態が悪く、規模・構造共に不明[1]であるが、西辺中央の相対する位置に、他の部分の地覆石より大きな長辺60cm、短辺40cmの長方形の地覆石が存在する。この二個の地覆石外辺間の距離は 295cm、内辺間 173cmとなり、南階段とほぼ同規模と考えられる。その間には地覆石が見られず、こぶし大から人頭大の自然石が敷きつめられている。階段の板石が全く見られないのは、後世、他の用途に転用されたためではないだろうか。

基壇上の南辺近く、南階段を中心に対称の位置に、土器溜めが存在した。土器溜めの掘り方は明確にできなかったが、深さは地覆石近くにまで至る。両土器溜めからは、共に多数の土師器小皿片が出土し、西側土器溜めからは、瓦器細片も出土している。（図13— 9・12・13、図版七）両土器溜めは、状況、出土遺物から同時期と考えられるが、時期の決定は困難である。基壇修復、あるいは崩壊時に、鎮壇のために土器を埋めたと考えられる。

雨落溝は確認できなかった。南辺の保存状態が良好であったことから考えると、創建時から存在しなかったとも考えられる。

② 溝

トレンチ南端近くで幅40cm、深さ14cmの溝を確認した。埋土は灰色シルトで塔基壇周辺の埋土に一致し、瓦が出土している。トレンチが狭小なため、性格を明らかにすることはできないが、寺院に伴う施設である可能性が強い。

また、基壇南辺より南へ 1.5mの地点で、幅20cm、深さ 6 cmの溝を確認した。埋土は黒褐色粘質土、無遺物である。かなりの削平を受けているようである。

③ ピット

基壇南辺南側、地山面で３個のピットを確認した。埋土はいずれも黒褐色粘質土、須恵器（図13— 2）、円筒埴輪片（図13—23）が出土し、瓦は全く含まれない。やはり、かなり削平され

ており、深さ10～25cmにすぎない。掘立柱建物に伴う柱穴であると考えられ、上述の溝を含めて、寺院造営以前に集落が存在したものと思える。

註

（1）大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告第19輯　1968

3　遺物

①瓦塼

a．軒丸瓦（図５・図版五）

軒丸瓦は二種類ある。Ⅰ類は複弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、瓦当直径17.8cm、中房には１＋４＋８の蓮子、各弁には高いがやや肉薄の子葉を伴い、外区内縁には珠文、内傾する外縁には凸線鋸歯文がめぐる。破片を含めて20点出土しており、胎土が密、長石の砂粒を含む点は全てに共通しているが、焼成良好で灰白色を呈するものと、焼成やや不良で暗灰色を呈するものがある。丸瓦部との接合は、丸瓦広端を瓦当裏面上端近くに当て、その上下に粘土を厚く補充し、ヘラ削り、ナデ調整を施す。丸瓦部凹面には８～９本/cmの布目が残る。Ⅰ類は藤原宮跡に代表される平城宮跡6281Ａｂ型式の軒丸瓦と同笵である(1)。しかし、藤原宮跡出土品と比較すると、文様の鋭さに欠け、胎土も異なると思えるうえ、他の軒丸瓦やこれに伴う軒平瓦が見られないことから考えると、瓦の移動を考えるよりも、笵の移動を考えるべきであるのかもしれない。

Ⅱ類は単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、瓦当復元直径15.4cm、厚さ 2.7cm、小さい中房に１＋５の低い蓮子、弁は先端が尖り気味で幅が広く、外区には間隔が広く低い珠文がめぐる。胎土はやや疎、長石を多く含む。焼成はやや不良、灰色を呈する。一点のみの出土であり、差し替え瓦と考えられる。

b．軒平瓦（図６、図版五）

軒平瓦は軒丸瓦に比較して、非常に数量が少なく、２点しか出土していないが、地元の松下由太郎氏から片山廃寺出土という軒平瓦を一点寄贈していただいたので、この３点について述べることにする。

Ⅰ類は重孤文軒平瓦である。重孤文は型押しによるものではなく、ヘラ状工具によって粘土を削り取って文様とする。重孤文は二重しか残っていないが、粘土を貼りつけることによって、下部にさらに一重をめぐらせた三重孤文と考えられる。凹面には布目、凸面には平瓦Ⅳ類のくさび形叩き目を残す。胎土はやや疎、長石を多く含み、雲母をわずかに含む。焼成良好、淡灰色を呈する。

Ⅱ類は段顎形式の唐草文軒平瓦であり、上外区に間隔がやや広く低い珠文、その下に二重の圏線をめぐらせる。均整唐草文になるのではないだろうか。色調淡灰色、胎土やや疎、長石を多く含む。

Ⅲ類は連珠文軒平瓦、松下氏から寄贈されたものである。片山廃寺塔に伴うものと断言でき

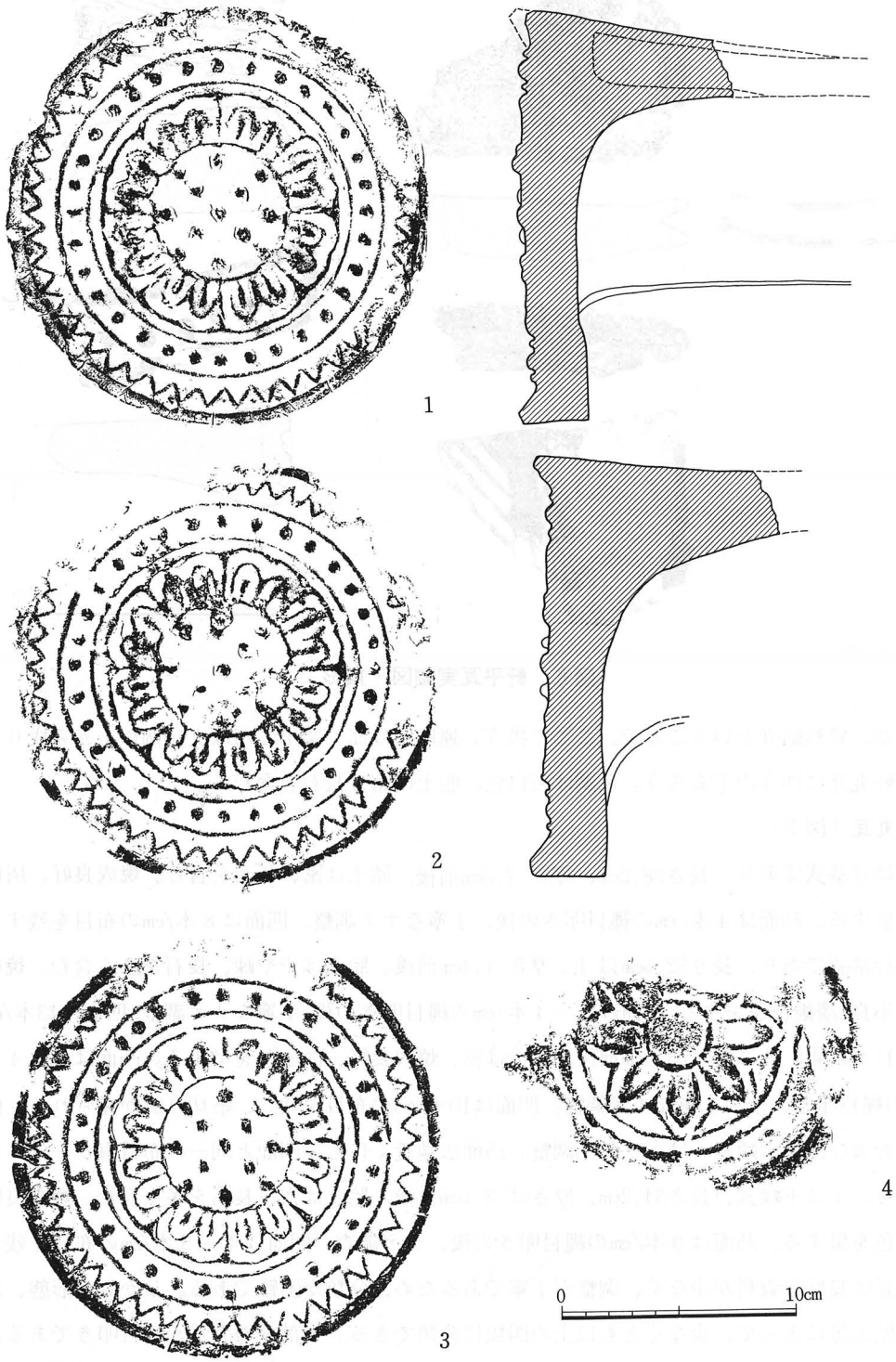


図5　軒丸瓦実測図・拓影

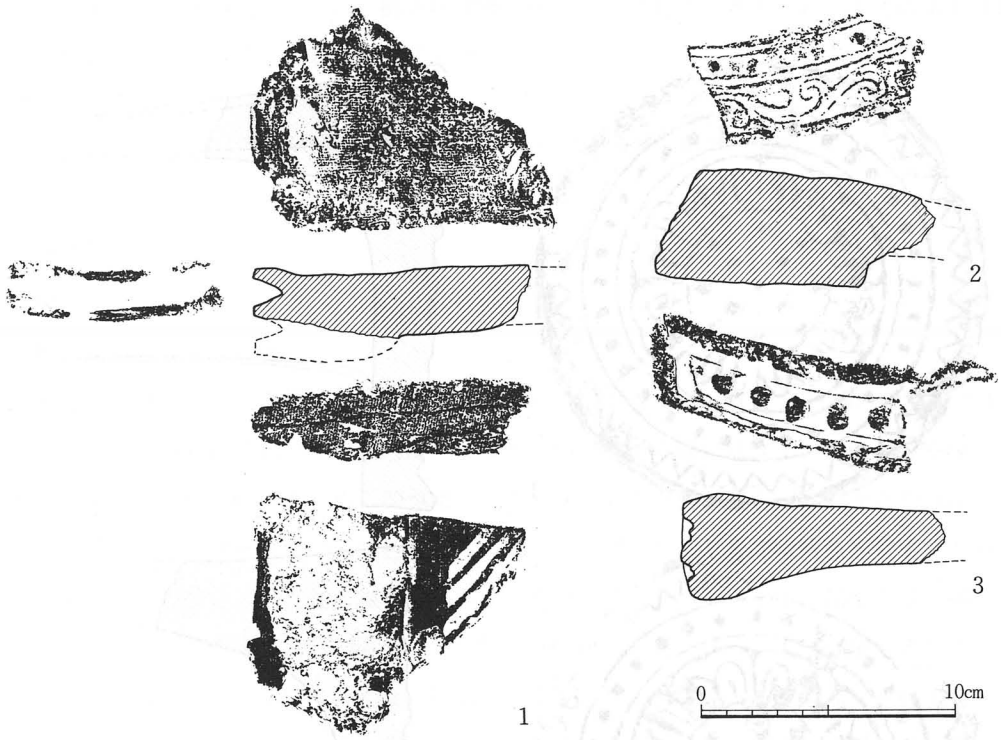


図６　軒平瓦実測図・拓影

ないが、資料紹介ということで、ここで扱う。連珠文は高く突出した珠文10個以上から成り、巴文軒丸瓦に伴うのであろう。色調は灰白色、胎土は密、長石を含む。

ｃ．**丸瓦**（図７）

１は行基式であり、長さ38.2cm、厚さ 2.0cm前後。胎土は密、長石を含む。焼成良好、灰白色を呈する。凸面は４本/cmの縄目叩きの後、丁寧なナデ調整。凹面は８本/cmの布目を残す。２も行基式であり、長さ32.6cm以上、厚さ 1.4cm前後。胎土はやや疎、長石を多く含む。焼成やや不良､淡褐色を呈する｡凸面は３～４本/cmの縄目叩きの後､丁寧なナデ調整｡凹面は13本/cmの布目を残す。３は厚さ 3.0cm前後。胎土は密、焼成良好、淡灰色を呈する。凸面は３～４本/cmの縄目叩きの後、丁寧なナデ調整。凹面は10本/cmの布目を残し、糸切り痕が見られる。側縁、および凹面広端近くはヘラ削り調整。凸面広端近くにも、凹面と同一の布目痕が一部に見られる。４は玉縁式、長さ34.2cm、厚さは 3.1cm前後。胎土は密、長石を多く含む。焼成良好、暗灰色を呈する。凸面は９本/cmの縄目叩きの後、ナデ調査。凹面は４～５本/cmの布目を残す。

丸瓦は良好な資料が少なく、調整が丁寧であるため、分類が困難である。しかし、形態、調整、胎土等によって、少なくとも以上の四類に分類できる。大部分の丸瓦が縄目叩きであるが、平行叩きを施す小片も見られる。また、灰白色の丸瓦数点に、赤色顔料の痕跡が認められ、朱塗りの丸瓦が存在したと考えられる。

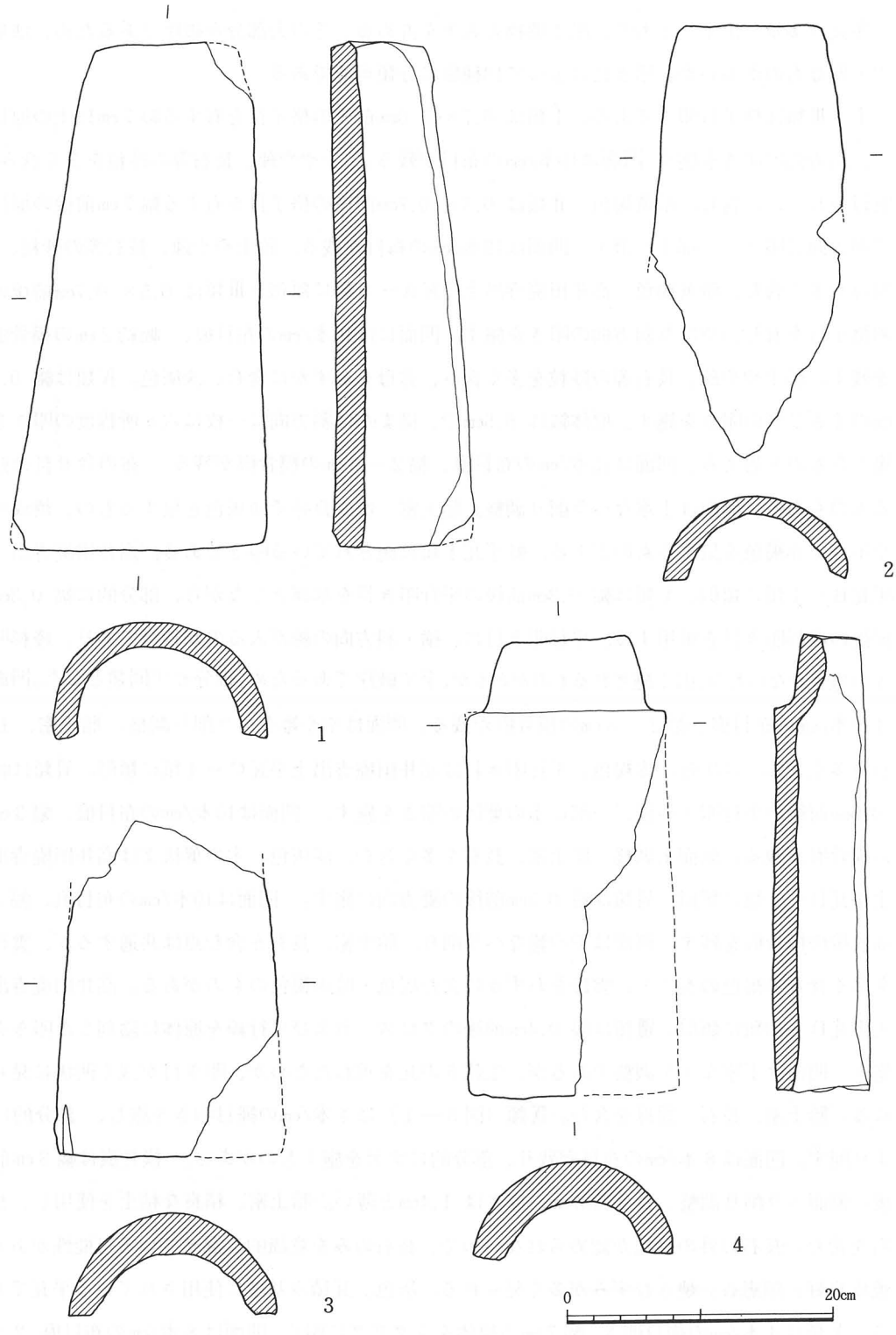


図7　丸瓦実測図

d．**平瓦**（図８．９．図版六）

平瓦は多量に出土しており、出土遺物の大半を占める。その大部分が破片であるため、法量の不明なものが多いが、叩き目によって13種類に分類可能である。

Ⅰ～Ⅲ類は格子目叩きである。Ⅰ類は 0.7× 1.0cm前後の格子目を有する幅７cm以上の原体で、斜方向に叩きを施す。凹面は10本/cmの布目が残る。胎土やや疎、長石等の砂粒を多く含み、雲母をわずかに含む。暗黄褐色。Ⅱ類は 0.5× 0.7cm前後の格子目を有する幅７cm前後の原体で斜方向に叩き、一部すり消す。凹面は12本/cmの布目が残る。胎土やや疎、長石等の砂粒、雲母を多く含む。暗黄褐色。高井田廃寺出土平瓦Ａ－５類に類似[2] Ⅲ類は 0.5× 0.7cm前後の斜格子目を有し、やはり斜方向の叩きを施す。凹面には10本/cmの布目痕、 幅約２cmの模骨痕を残す。胎土やや疎、長石等の砂粒を多く含み、雲母をわずかに含む。淡灰色。Ⅳ類は幅 0.7cmのくさび形の叩きを施す。原体幅は 6.5cmで、横または斜方向に一枚に六ヶ所程度の叩きを施したものと思える。凹面は12本/cmの布目痕、幅２～３cmの模骨痕が残る。 布の合せ目の残るものもある。側面は丁寧なヘラ削り調整。胎土密。焼成良好で淡灰色を呈するもの、焼成やや不良で赤褐色を呈するものがある。軒平瓦Ⅰ類に施されている叩きである。高井田廃寺出土平瓦Ｂ－１類に類似。Ⅴ類は幅 0.3cm前後の平行叩き目を基調としながら、部分的に幅 0.3cm前後の綾杉叩き目を併用する。平行叩き目に、横・斜方向の線が入るのが特徴であり、綾杉叩きの施されないもの、広く施されるものがあるが、全て破片であるため、細分せず同類とした。凹面は10本/cmの布目痕、幅２～３cmの模骨痕が残る。側面はやや雑なヘラ削り調整。胎土密、長石を多く含む。淡灰色、赤褐色。平行叩き目は高井田廃寺出土平瓦Ｃ－４類に類似。Ⅵ類は幅 0.3cm前後の平行叩きの後、一部に木の葉状の叩きを施す。 凹面は10本/cmの布目痕、幅３cmの模骨痕が残る。側面未調整。胎土密、長石を多く含む。淡灰色。木の葉状文は高井田廃寺出土平瓦Ｄ－１類に類似。Ⅶ類は幅 0.3cm前後の縦方向に施す。 凹面は10本/cmの布目痕、幅３cm前後の模骨痕を残す。側面はやや雑なヘラ削り。胎土密、長石を含む点は共通するが、雲母を多く含む赤褐色のものと、雲母をわずかに含む灰色・暗赤褐色のものがある。高井田廃寺出土平瓦Ｄ－10類に類似。Ⅷ類は幅 0.4cm前後のクロス、および平行線を原体に陰刻した叩きを施す。凹面は丁寧なナデ調整であるが、生乾きの瓦を重ねたためか、叩き目が浅く凹状に見られる。胎土密、長石・雲母を含む。Ⅸ類（図８－１）は４本/cmの縄目叩きを施し、 部分的にすり削す。凹面は８本/cmの布目が残り、部分的にナデを施すものがある。 模骨痕は幅３cm前後。側面ヘラ削り調整。長さ約29cm、厚さは 1.4cmと薄い。胎土密、精良な粘土を使用し、長石を含む。長石以外の砂粒が認められないので、長石のみを意識的に混ぜている可能性がある。焼成良好、須恵質。焼きひずみが多く見られる。灰色。瓦積み基壇に使用されている平瓦である。Ⅹ類は４本/cmの縄目叩き。幅７cmの原体をジグザグに叩く。凹面は８本/cmの布目痕、２～３cm幅の模骨痕を残す。側面は丁寧なヘラ削り。胎土密、長石を含む。淡黄褐色、灰色。播磨広渡寺廃寺跡、柏原市東條尾平廃寺跡で同種の平瓦が見られる[3] Ⅺ類（図８－２・３）は、４

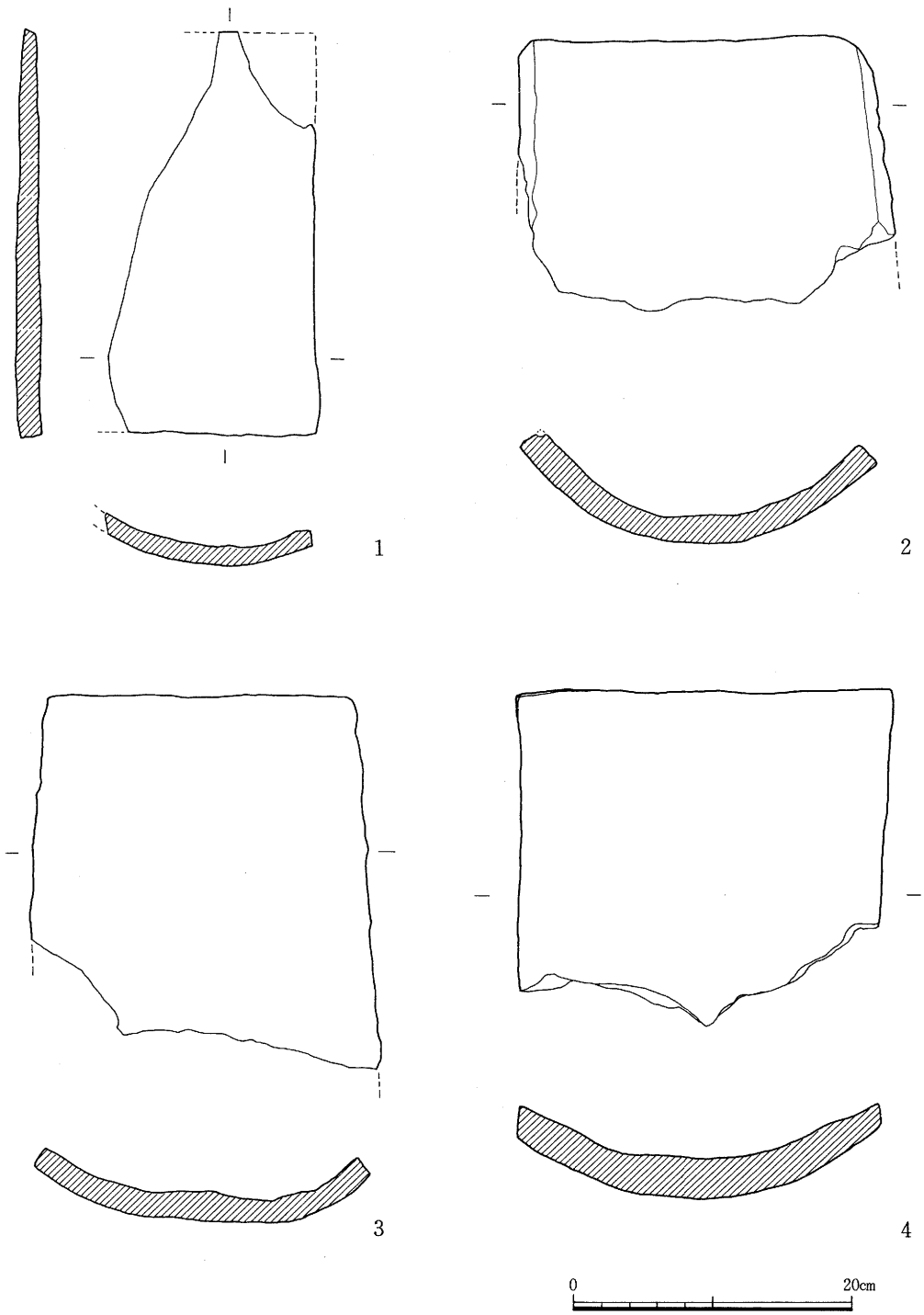


図 8　平瓦実測図

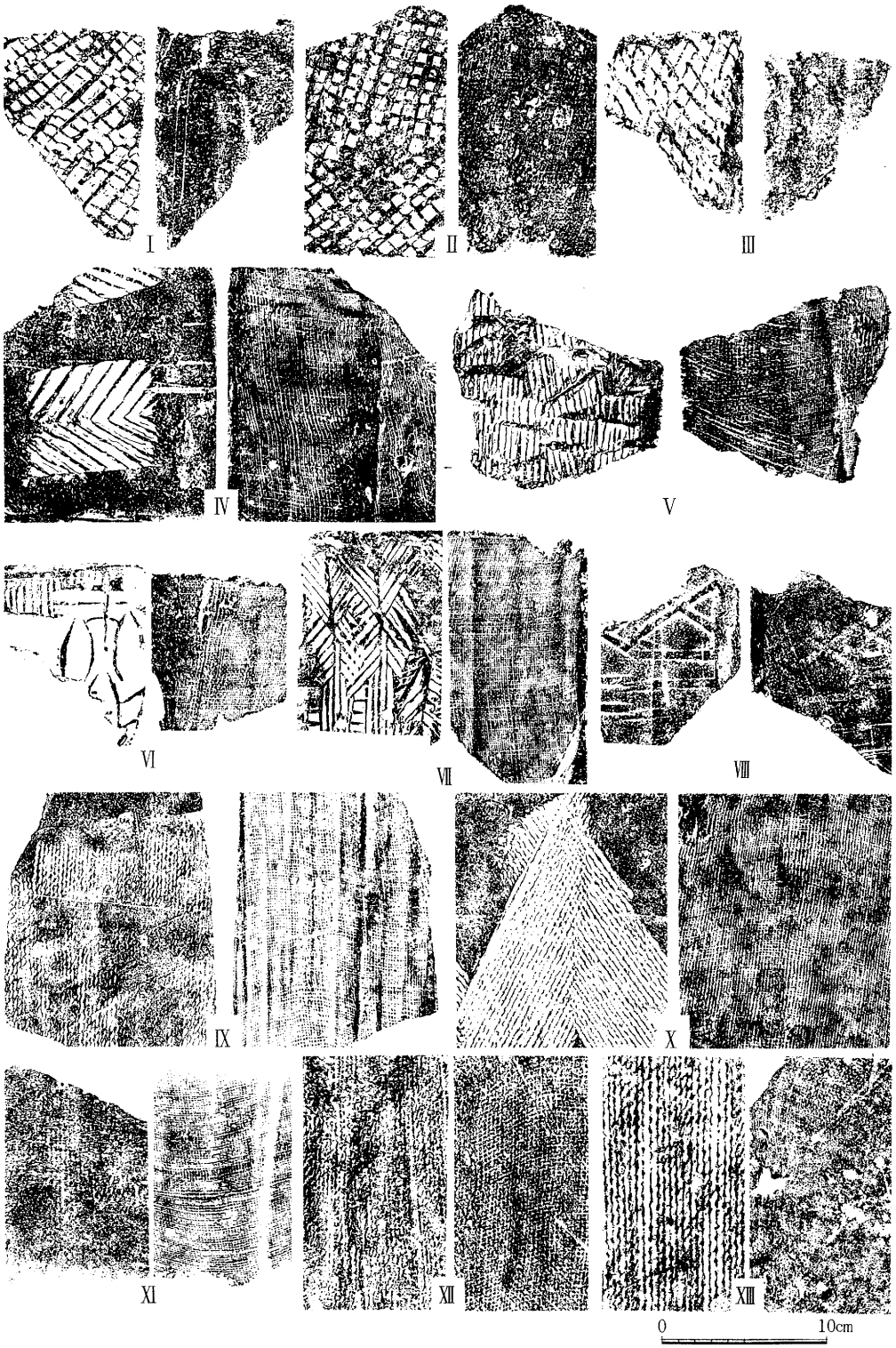


図9　平瓦叩き目拓影

本/cmの縄目叩きを施し、丁寧にすり消している。凹面は８本/cmの布目痕、４～５cm幅の模骨痕を残す。側面は雑なヘラ削り。狭端幅約25cm、厚さ約２cm。胎土密、長石を多く含む。灰色。Ⅻ類（図８－４）は、４本/cm の縄目叩きを施し、凹面は４本/cm の布目が残る。狭端幅約27cm。胎土やや疎、長石を多く含む。淡灰色。ⅩⅢ類は２～３本/cmの縄目叩きを施し、凹面は８本/cmの布目を残す。胎土やや疎、長石を含む。淡褐色。

13種類の出土比率は正確に出していないが、各類とも大差は認められない。また、Ⅲ～Ⅶ、Ⅸ～Ⅺ類は模骨痕、側面調整等から、桶巻作りと考えられ、Ⅷ・Ⅻ・ⅩⅢ類は一枚作りと考えられる(4)。Ⅰ・Ⅱ類は断言できないが、桶巻作りである可能性が強い。なお、Ⅱ・Ⅳ～Ⅶ類は、高井田廃寺出土平瓦に類例が見られ、その創建時期である７世紀後葉前後と考えられている。

平瓦の叩き目によって分類を試みたが、それぞれの叩き目の時期、製作地は明らかにできない。また、叩き目の差が、工人の差によるものか、工人集団の差によるものか確かでないが、Ⅴ・Ⅵ類のように二種類の叩きを併用する例が、高井田廃寺でも多数報告されており、一工人集団内で数種類の叩き板を使用していた例があることは確実である。現段階で言えるのは、少なくともⅠ～Ⅶ類は創建時期の瓦であり、大和川対岸の高井田廃寺に類例が見られることから、高井田廃寺の平瓦を製作した工人、またはその系譜をひく工人によって柏原市域で製作されたのであろうということである。７世紀後葉頃と考えられている高井田廃寺と 700年前後と考えた片山廃寺は、やや年代幅が認められるので、今後、推定年代の修正、工人集団内での瓦製作技術の伝習等の可能性を含めて、検討を加えていきた。

柏原市域では、非常に多種多様な叩き目が見られ、同一の叩き目をもつ瓦の胎土が、基本的に同一であることから、将来、瓦窯の発見等によって、製作地を決定できるであろう。また、その年代も限定できるようになるであろう。その一資料として、分類を試みた。

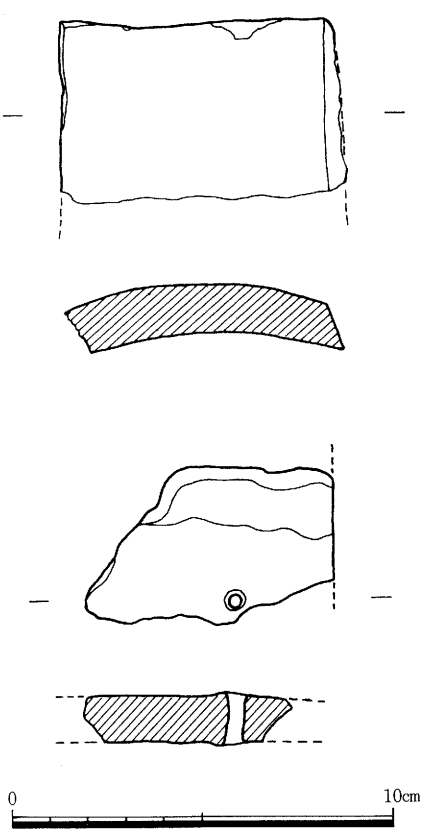


図10　道具瓦実測図

ｅ．道具瓦（図10、図版五）

１は熨斗瓦破片である。幅15cm。凸面は４～５本/cmの縄目叩きを施し、凹面は４本/cmの布目が残る。胎土やや疎、長石を多く含む。淡灰色。半乾燥状態の平瓦Ⅻ類の長辺に沿って、凹面中央に、刀子状の工具で切り込みを入れ、半截することによって熨斗瓦とする。平瓦は一枚作りによって製作さ

れているが、熨斗瓦製作時の技法は、桶巻作り四分割の技法と同一である点が注目される。

2は平瓦の破片であるが、小円孔が貫通している。凸面は磨滅によって調整不明、凹面は8本/cmの布目が残り、粘土の継ぎ目が認められることから、桶巻作りである。円孔は凹凸面調整後、凸面から凹面に竹管状のもので穿たれている。胎土密、長石を含む。焼成やや不良。淡赤褐色。円孔は釘穴と思えるが、錆着は認められない。

これ以外に、小破片ではあるが、鬼瓦と思える小破片が2点出土している。

f．塼（図11・12、図版七）

塼は基壇上面の化粧のために敷かれていたと考えられる。破片も含めると36点出土しており、長方塼と三角塼から成る。長方塼と確認できるもの14点、三角塼4点、他は破片であり、いずれとも決められない。大部分の塼に、焼成前に文字がヘラ書きされている。1は「南下上三」、2は「東――」、3は「――東六七」、4は「南――」、6は「北西下中（五か？）十二」と読める。これ以外に「――南六三」「北西下上――」「東下五」等の文字がある。全て方角、上中下、数字を表した文字であり、基壇上面の配置場所を示したと考えられるが、その意味は確認できない。また、2・3は同一人物によって書かれたと思えるが、1・4のように、「南」の書き方が異なっているものも見られる。

長方塼の法量は、幅16cm前後、厚さ3cm前後、長さは31.2cm（図12―1）、40.0cm（図12―5）の2点のみ確認できた。また、他の塼と組み合せるために、幅3cm、厚さ1～1.5cmの粘土板を長辺に貼り付けているが、両辺に見られるもの、一辺のみのもの、ないものがあり、短辺にも見られるものがある。三角塼は直角二等辺三角形であり、斜辺が47cm前後、他の二辺が33cm前後である。やはり、斜辺と他の一辺に組み合せ部分を設けている。全面ナデ調整であるが、組み合せ部分を板状の工具でナデているものが見られる。糸切り痕の残るものも多い。長石を多く含み、淡黄褐色を呈する。全ての塼が同一時期であることは間違いないが、その時期は不明である。創建時のものではないだろうか。

塼敷状態の復元は、完形品が少ないことから困難ではあるが、16cm前後が一つの基準となっていること、長方塼に長さの異なるものが見られること、組み合せのための突出部分が見られること等から復元を試みると以下のようになる。外周に長さ40cmの塼（図12―5）を敷き、その内側に三角塼を斜辺を外向きに敷き、その内側に長方塼を45°に敷きならべる。（図11）この復元案でも、葛石との関係など細部で問題点が残るが、一定の規格・基準に基づいて製作されていることは間違いない。

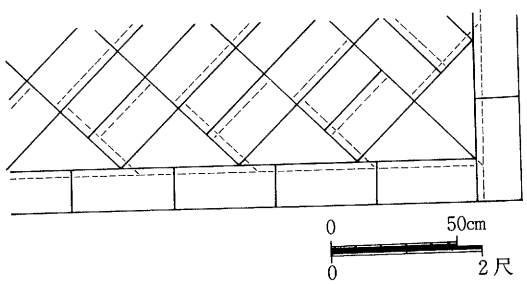


図11　塼敷推定復元図

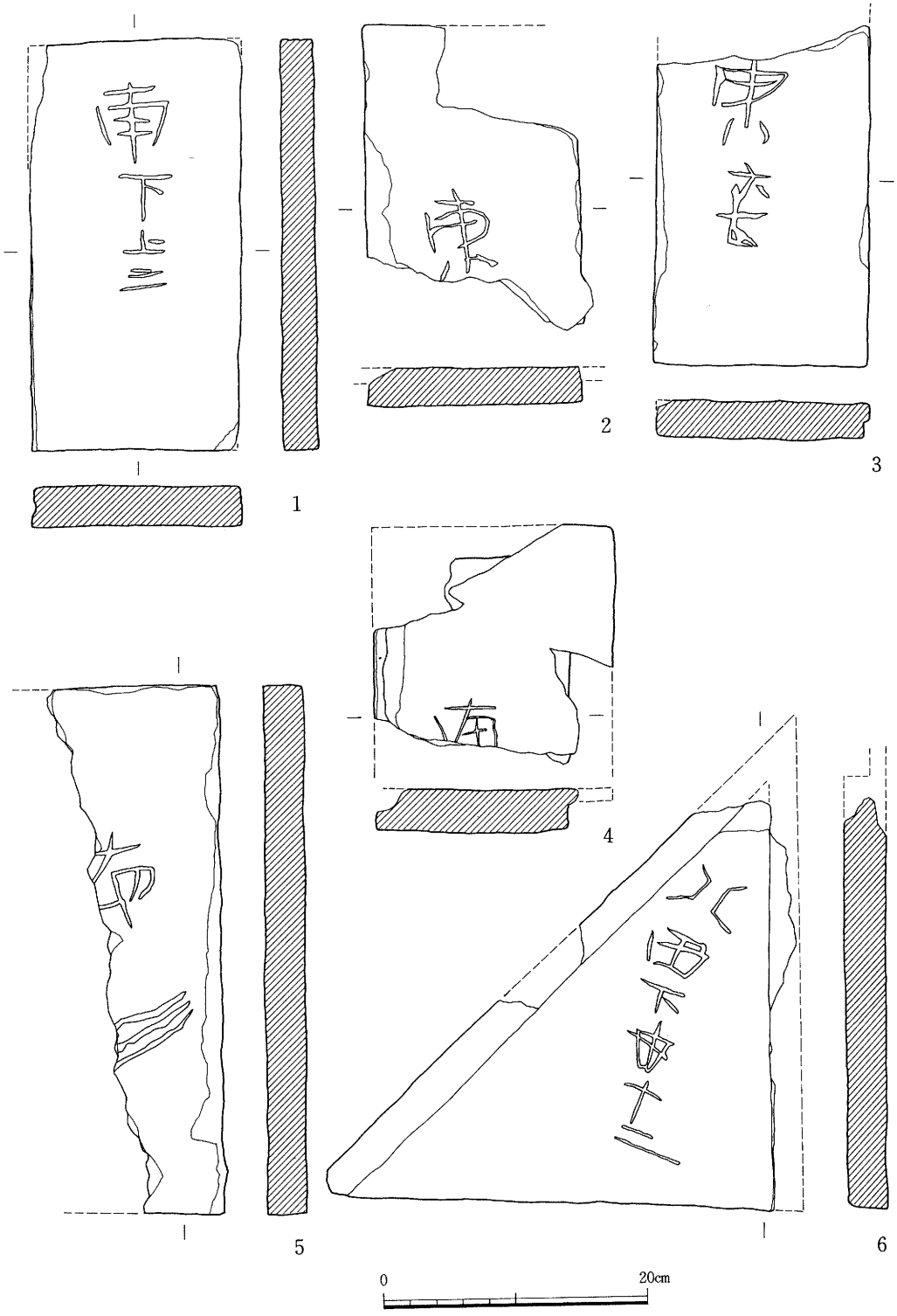


図12　塼実測図

②土器（図13・図版七）

須恵器蓋杯（１～４）。１は口縁内面にかえりがつき、外面に凹線が２本施される。２は南階段西側のピット内から出土。口縁端部は欠損。３は低い立ち上がりを有し、４は断面正方形に近い高台を有する杯身。１・３・４は盛土から出土。

土師器（５～14）。椀（５・６）は、口縁付近横ナデ、内外面ナデ、もしくは指頭押圧による調整。土師器小皿（７～13）は、ナデ、指頭押圧による調整。７はやや深く、口縁部ナデ調整。口縁内面にススが付着。９・12は南階段東側基壇内土器溜めから出土、13は同西側基壇内土器溜めから出土。羽釜（14）は、口縁端部が肥厚し、外反。鍔は薄い。

瓦器（15～18）。瓦器椀（15）は、非常に低い高台がつく。瓦器椀は小片が数点出土しており、高台の比較的高いものから低いものまで見られるが、高台のつかないものは見られない。瓦器皿（16～18）は、低い高台がつく。17・18は内面底部に明瞭な平行暗文が見られる。

19は瓦質羽釜、口縁はやや内傾。20は白磁の鉢底部、内外面とも回転ナデ調整、内面に釉が塗られている。21はすり鉢、内外面とも回転ナデ調整、淡灰色を呈する。内面は使用したためか、やや磨滅している。東播磨系の土器である。

③埴輪（図13・図版七）

円筒埴輪（22・23）外面は縦ハケ後、横ハケを施す。内面は縦ハケが部分的に残るが、磨滅が著しい。焼成やや不良であるが、窖窯焼成と考えられる。23はヘラ記号が見られる。南階段西側ピット内出土。同種の円筒埴輪は数点認められるが、これ以外にも、復元直径36cm、凸帯幅 1.5cm、凸帯高 1.2cmの小片が一点ある。軟質、乳白色を呈し、断面が黒変していることから、野焼きである可能性が強いものである。

④鉄製品（図14・図版七）

かすがい（１～３）大形で断面方形のもの（１・２）と、やや小形で断面長方形のもの（３）がある。４はかすがいとも考えられるが、直角に曲がらず、孤状に曲がる。小形で断面は方形。

鉄釘（５～７）５は大形の方形頭鉄釘、６・７は長さ７cm前後の折曲頭鉄釘である。いずれも錆着が著しい。

⑤石製品

基壇に使用されていたと考えられる凝灰岩破片が多数出土したが、使用部分の判明するものは認められなかった。その中で、南階段東側で出土した直径24cmの半円状の切り込みをもつ50×60cmの大形の切り石は、塔の扉部分の柱に取りつくのではないかと考えられる。この凝灰岩は、塔基壇崩壊時の原位置を留めると判断したため、移動させずに埋め戻した。なお、凝灰岩については付章に詳しい。（図版一－４）

他に、サヌカイトがコンテナに約２箱出土しているが、加工痕と判断できる資料がないため、今回の報告では省略した。

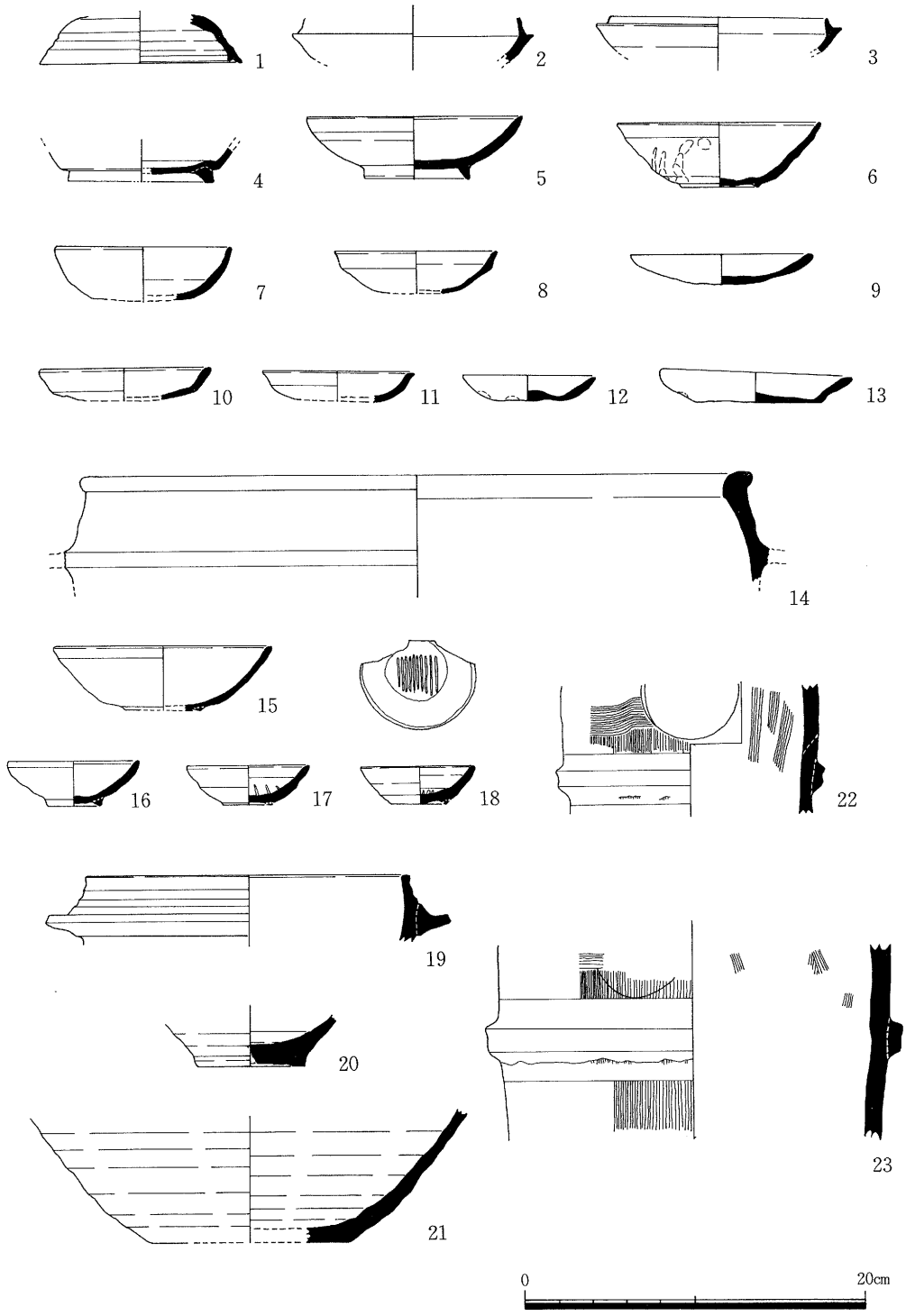


図13　土器・埴輪実測図

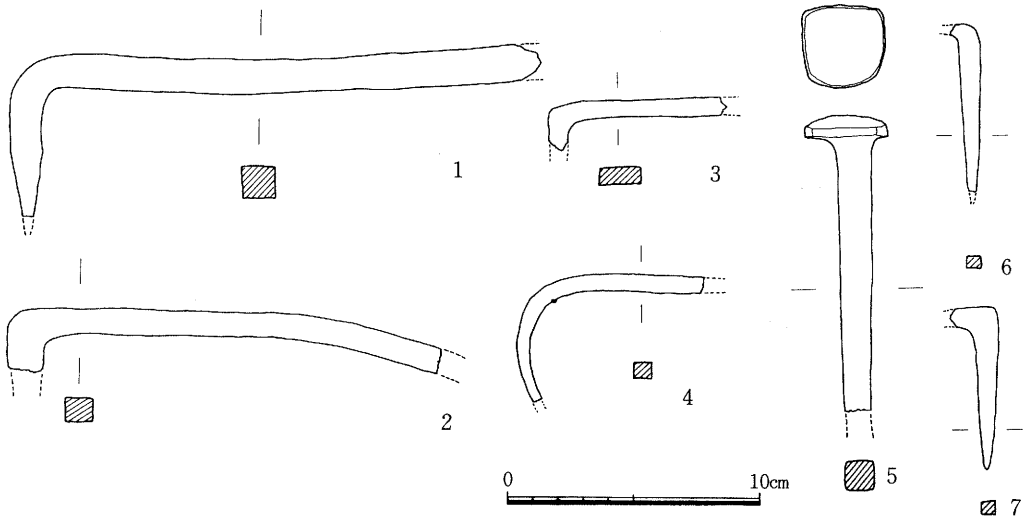


図14　鉄製品実測図

註

（1）奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦形式一覧』1978

（2）大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告第19輯　1968

（3）兵庫県小野市教育委員会・広渡寺廃寺跡発掘調査団『播磨広渡寺廃寺跡・発掘調査報告』1980
元興寺仏教民俗資料研究所『東條尾平廃寺跡・鋤田寺跡推定地発掘調査報告書』1973
広渡寺廃寺跡では、桶巻作りと報告されているが、東條尾平廃寺跡では桶巻作りとも一枚作りとも考えられると報告されている。同叩き目を施す平瓦は、播磨の繁昌遺跡、大寺遺跡でも出土しているということであり、柏原市大県南遺跡（山下寺跡）でも出土しているが、大県南遺跡例は一枚作りと考えられる。片山廃寺出土平瓦は、側面に分割した痕跡が残っていること、模骨痕が残っていることから、桶巻作りと考えられる。なお、東條尾平廃寺跡は、伴出土器から古くとも8世紀末と考えられているが、土器実測図を見る限りでは、8世紀中葉、もしくは前葉まで逆上る可能性が考えられる。X類の平瓦は、柏原市域では8世紀代に盛行したのではないだろうかと考えている。

（4）小林行雄「屋瓦」『続古代の技術』1964

第4章　ま　と　め

塔基壇は予想以上に良好な状態で残っており、今回の発掘調査による成果は大きいものがあった。それに伴う問題点も多く、いくつかの問題点について考えてみたい。

まず問題となるのは、塔の創建時期である。創建の年代を推定する資料は、瓦以外になく、藤原宮跡に代表される平城宮跡6281Ａｂ型式の軒丸瓦Ⅰ類が多数出土していることから、藤原宮造営直後、すなわち 700年前後と考えることができる。しかし、軒平瓦の出土が極端に少なく、発掘調査による出土は二種、二点のみ、いずれも破片であり、藤原宮跡で軒丸瓦Ⅰ類に伴っている扁行唐草文の軒平瓦は出土していない。将来的に発見されるかもしれないが、軒丸瓦の出土量から考えて、疑問が残る。軒平瓦未使用の可能性も無いとは言えない。あえて、軒丸瓦Ⅰ類は伴う軒平瓦を想定するならば、軒平瓦Ⅰ類であろう。重弧文の施文方法がヘラによることを考えれば、更に古くなる可能性もある。また、軒平瓦Ⅰ類と同種のくさび形叩き目（平瓦Ⅳ類）を施す高井田廃寺出土の平瓦に「玉作ꟾ飛鳥評」のヘラ書きが見られ、「評」の文字から７世紀後半代に位置づけられる。また、Ⅱ・Ⅳ～Ⅶ類の平瓦も同時期とされている。このことから、軒平瓦Ⅰ類、平瓦Ⅱ・Ⅳ～Ⅶ類は軒丸瓦Ⅰ類に伴う可能性と、それに先行する可能性が考えられるが、軒丸瓦Ⅰ類よりも古い形式の軒丸瓦が発見されない限り、同時期と考え、創建時期は 700年前後と考えるのが妥当であると思える。

他の軒瓦については、軒丸瓦Ⅱ類が平安時代中頃、軒平瓦Ⅲ類が鎌倉時代と考えられる。軒平瓦Ⅱ類の類例が見当たらないが、二重の圏線、間隔が広く突出の低い珠文等から、奈良時代である可能性が考えられる。

次に、基壇が瓦積みに補修された時期であるが、これも断定は困難である。基壇は全てⅨ類の平瓦によって築かれている。平瓦Ⅸ類は桶巻作り、須恵質で薄く、凸面縄目叩きをすり消す等の特徴を有し、創建瓦とも考えられるが、時期比定は困難である。さらに、基壇の補修が、平瓦Ⅸ類の製作と同時期か、後の時期かを判断する資料にも欠ける。このため、現段階では不明と言わざるを得ない。

以上を要約すると、創建は 700年前後であり、少なくとも２～３回、瓦の差し替えが行なわれている。そして、その間に基壇が瓦積みに補修されているということになる。また塔の廃絶時期は、室町時代前葉の瓦器椀・瓦質羽釜等を最後にし、それ以後の遺物が見られないことから、この時期に求めることができるのではないだろうか。

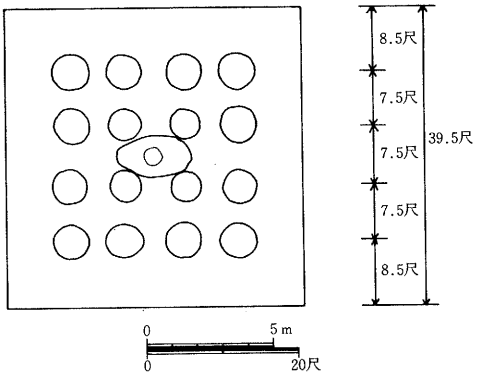


図15　塔基壇復元図

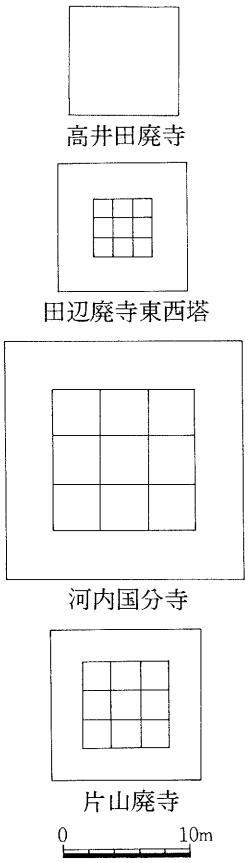


図16　塔基壇比較図

これに関する江戸時代の文献「益池氏系図」によると、「当村往古、片敷山と申候、上之山、又、堂山観音寺文殊院薬師堂と申古跡の儀、千百十六年以前、四十二代文武天皇様御時、慶雲四庚午年御建立聞伝申候、其後七百六十四年以前、天喜三辛卯年焼失仕候由、聞伝申候御事云々　宝暦二年壬申正月」とある(1)。慶雲４年は 700年、天喜３年は1055年、宝暦２年は1752年にあたり、創建年代は瓦から推定した年代に合致する。しかし、この史料は、年数、干支が実際と合わない点から、あまり信頼がおけない。また、焼失については、凝灰岩に熱を受けたものがあるが瓦等には全く認められないことから、少なくとも塔が崩壊するような火災はなかったと言える。凝灰岩の熱作用は、他の原因を考えるべきであろう。塔は、瓦の堆積状況から、火災以外の何らかの原因で崩壊したと考えられる。

また、建武３年（1336）12月17日に片山で南北朝の争乱があったという史料（田代文書）がある(2)。南朝方が北朝方に敗れており、推定した塔の廃絶時期と南北朝争乱の時期が近いのは、偶然とは思えない。片山廃寺を支えていた勢力が、南北朝争乱に敗れたことによって、片山廃寺が廃絶する結果になったのではなかろうか。

次に塔の構造についてであるが、塔基壇一辺長が 11.87m（39.5尺）、柱間を2.25m （7.5尺）等間隔と復元した。(図15) トレンチ発掘のため、正確さに欠けることを前提として、考察を加えてみたい。柏原市内での塔跡発掘例は、高井田廃寺（鳥坂寺）、田辺廃寺東・西塔、河内国分寺をあげることができる(3)。その規模を比較すると図16のようになるが、河内国分寺は七重塔と考えられるため、これを除外すると、他の塔の規模はそれほど大差がないが、その中でも、片山廃寺がやや大きいことがわかる。(図16)

現在、薬師堂に存在する礎石は、心礎を含めて５個である。更に、同所に祀られている不動に使用されている巨石も礎石である可能性が強い。礎石は１個が安山岩であるが、他は全て花崗岩である(4)。心礎は一重孔式心礎であり、柱径は76cmを計る。柱径の約40倍が塔の高さであるならば、約30mの高さと復元できる。また、塔の一辺長(6.75m)÷心礎柱径(0.76m)＝ 8.9となり、三重塔が９～10、五重塔が７～８という資料に基づくと、三重塔である可能性が強くなるが、五重塔である可能性も否定できない。(5) 玉手山丘陵先端に建立されている事実は、眺望、特に大和川からの眺望をかなり意識した結果であろう。とするならば、三重塔よりも、五重塔と考えるのが妥当と思われる。(図17・図版四)

片山廃寺の伽藍配置については、今なお不明であるが、第二章でまとめたように、四天王寺式とする説と、薬師寺式とする説がある。後者の説をとる藤沢氏は、この塔跡を西塔とした方一町の寺域を復元している。しかし、今回の発掘調査によって、塔跡の主軸は、従来考えられていた南北方向ではなく、磁北から約22°東に偏していることが判明した。この事実に基づくと、従来の二説はいずれも成立し難いことになる。そこで次のような復元を試みた。

まず、塔跡北方の片山神社は寺域に含まれるであろう。しかも、神社の建物が南北方向でなく、東に偏している点を重視すると、この建物の成立以前に、片山廃寺の主要伽藍が存在したのではないだろうか。存在したとするならば、それは講堂であろう。すると、位置関係から、薬師寺式、大官大寺式等の伽藍配置が考えられる。いずれも藤原京内の寺院であり、時期に矛盾はない。地元の人の話によると、塔跡の西には池があり、その西には水田が広がっていたが、水田に囲まれて微高地が存在したということである。その地は、現在でも一部が畑として残っており、等高線は西へ張り出している。この地を西塔と考えることも可能であろう。しかし、礎石等が全く認められない点に疑問が残る。

寺域は、藤沢氏が寺域西限とした旧道を中央参道に、中央参道と考えた旧道を東限と考える。すると、西限は標高30mの等高線よりやや東側になる。現在、30mの等高線以東は傾斜が緩やかであるが、以西は急激に傾斜しており、傾斜地ではあるが、この寺域復元に無理はないと考える。この復元によると、藤沢氏が推定された寺域とほぼ同規模となり、一町弱である。なお

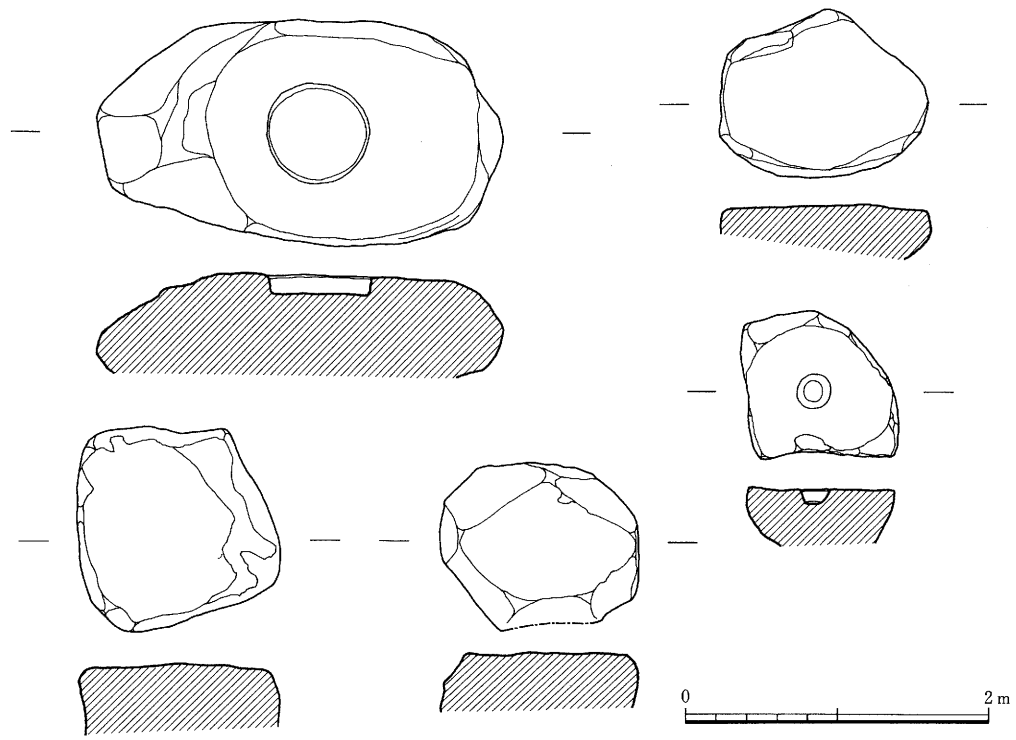


図17　礎石実測図

寺域内には薬師堂、又堂、辻堂、戸井畑の小字が見られ、片山廃寺に関連する小字であるかもしれない。（図18・19）以上のように伽藍配置、寺域を復元してみたが、問題点も多々ある。推定金堂・講堂付近での水道工事立会調査では、瓦があまり出土しておらず、塔跡の東方で瓦がよく出土する。このような段階での伽藍配置、寺域復元ではあるが、叩き台として復元を試みた。

今一つの問題点は、主軸が東に偏しているという事実である。地形に影響されたためとも考えられるが、現地形から想定すると、主軸を南北方向にすることが不可能であったとは思えない。他の原因を考えると、何度か触れたように、大和川からの眺望を意識したために主軸を東に振ったと考えることもできる。しかし、主軸を少し振ることによって大きな効果があったとも思えない。主軸の偏りの原因については不明と言わざるを得ない。

次に、片山廃寺を創建した氏族については、当地が安宿郡尾張郷であることから尾張氏であるとする説が最も有力であるが、文献史料は存在しない。尾張氏は、天皇家との関係が深く、内廷で活躍したと考えられている有力氏族であり、大和・尾張をはじめ、各地に同族関係をもつ氏族が見られる。また、海上交通に関わったとも考えられており、大和川・石川の合流地点

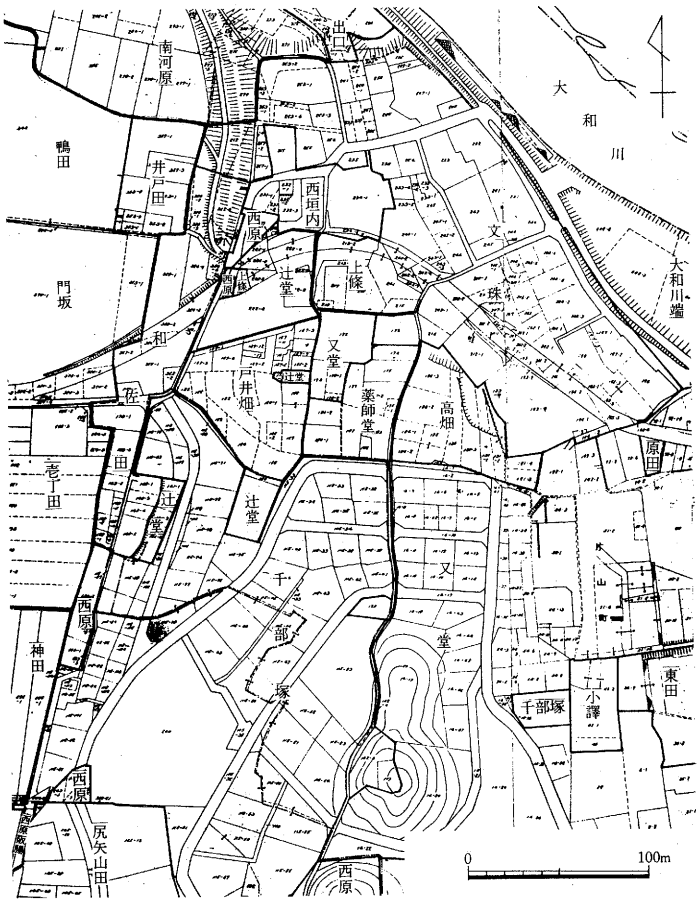


図18　片山廃寺周辺小字地図

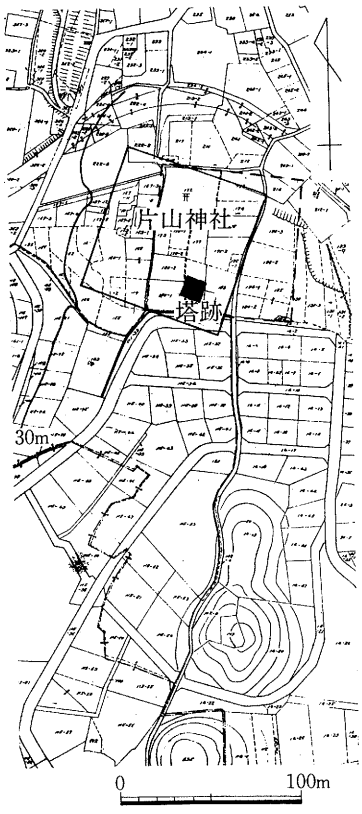


図19　片山廃寺寺域推定復元図

に尾張郷が存在することと無関係ではないのかもしれない[6]。片山廃寺に、藤原宮跡と同笵の軒丸瓦が存在することは、当寺院を創建した氏族が中央政権と何らかの関係を有していた可能性を示すと考えられる。その氏族が尾張氏であるとすることに矛盾はないと思える。また、片山神社が春日神社とも呼ばれることから、藤原氏との関係を考える説については、田辺廃寺が存在する地も春日神社である点などから考えて、片山廃寺や田辺廃寺を支えていた氏族が、ある時期に藤原氏と関係をもつようになり、その結果、春日神社が祀られるようになったと考えられないだろうか。その時期、原因等については特別な考えをもっていないが、一つの可能性として考えてみた。

以上、片山廃寺について、現在の考えをまとめてみた。最後に、下層遺跡について触れてみたい。

今回の調査で出土した円筒埴輪片は5世紀後葉頃と考えられる。以前にも、調査地約30m西側で円筒埴輪列が確認されており、三角板鋲留短甲形埴輪も出土している。短甲形埴輪は、ハケ調整の後、全面を非常に丁寧にナデ調整し、細く鋭い工具による刻線で短甲を表現、鋲留は竹管を強く押しつけることによって表現する。色調は淡黄褐色であるが、一部赤褐色の部分が認められ、赤色顔料を塗っていたのかもしれない。草摺はほとんど失なわれているが、肩甲は一部残存する。構成がすばらしく、写実的であり、実物を見ながら製作していると考えられる。製作技術は高度である。革綴短甲は多数報告されているが、畿内での三角板鋲留短甲形埴輪の出土は大きな意味がある。発掘調査による出土でないために、今回の調査によって出土した円筒埴輪に伴うものであるかどうか不明である。しかし、片山廃寺寺域内に、かって古墳が存在したことは間違いないと考えられる。

玉手山古墳群は前期古墳群として著名であるが、調査地から南西約 100mの地点で実施された最近の調査でも、5世紀中葉頃から末葉頃にかけての円筒埴輪、家形埴輪等が発見されており、中期にもかなりの古墳が存在したものと考えられる。今後、古墳時代中期の玉手山古墳群を再評価しなければならない。

また、薬師堂前庭に、凝灰岩の切石が存在し、石棺材としての可能性が考えられる。片山廃寺塔基壇に使用されたものかとも考えていたが、材質は異なるようである[7]。

基壇南辺付近で検出されたピット、溝は、集落の存在を示していると考えられる。遺構内出土遺物が細片であるため、時期決定が困難ではあるが、6世紀後葉の須恵器杯身がこの集落の一時期を示していると考えられる。

すなわち、今回調査地周辺では、5世紀後葉頃には古墳が、6世紀後葉前後には集落が存在

し、700年前後に片山廃寺が造営されたと考えられる。古墳削平が寺院造営に伴うものかどうか、古墳・集落・寺院を営んだ人々に何らかの関係があるか否か等不明な点が多いが、古墳・集落・寺院と性格を異にするものが営まれ続けたという点は非常に興味深い。今後の調査によって、より一層明らかにすべく努力したい。

註

（1）藤沢一夫「柏原市域の古代寺院とその性格」『柏原市史』第四巻・史料編（Ⅰ）1975

（2）沢井浩三「中世史料」『柏原市史』第四巻・史料編（Ⅰ）1975

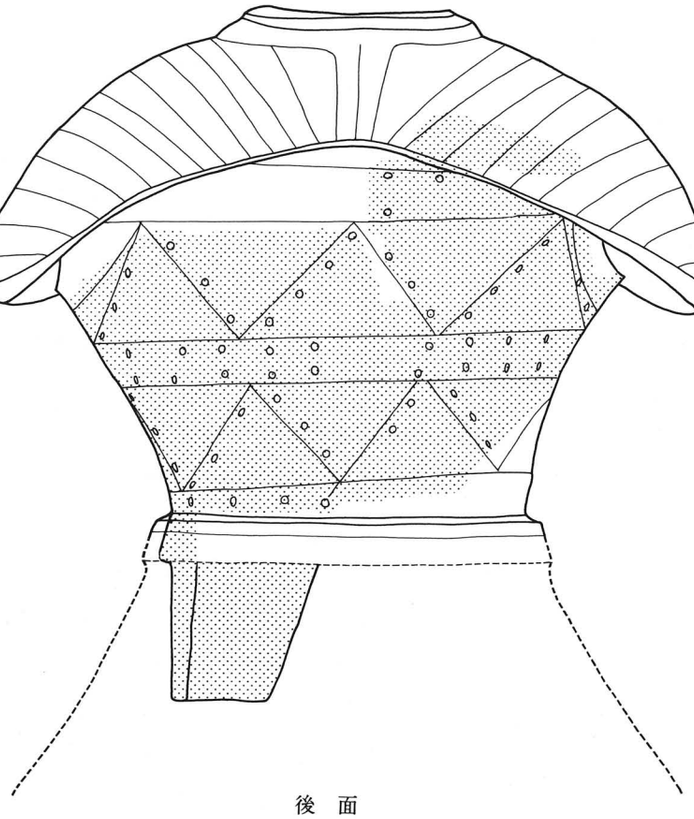
（3）大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告第19輯　1968
大阪府教育委員会『田辺廃寺跡発掘調査概要』1972
古代を考える会『河内国府と国分寺址の検討』古代を考える10　1977

（4）奥田尚氏教示

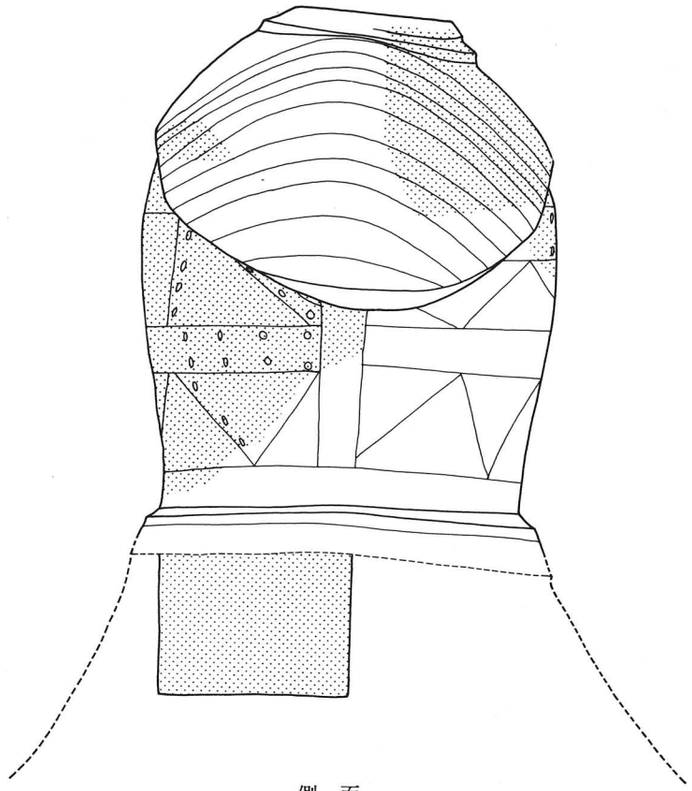
（5）望月董弘「礎石」『新版考古学講座』7・有史文化（下）1970

（6）新井喜久夫「古代の尾張氏について」『信濃』21巻1・2号　1969
服部良男「尾張連始祖系譜成立に関する一試論」『日本歴史』307号　1973
直木孝次郎「県主と古代の天皇」『日本古代の氏族と天皇』1964

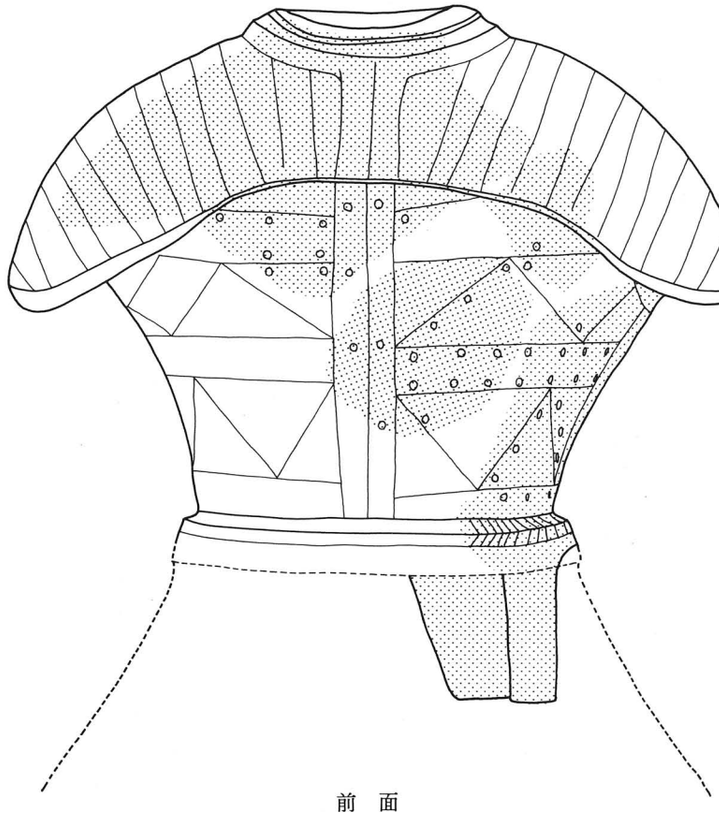
（7）奥田尚「中河内の古墳の石棺材」『古代学研究』97　1982



後　面



側　面



前　面

残存部を示す　0　20cm

図20　三角板鋲留短甲形埴輪

付章　岩石種とその産地

a．流紋岩質火山礫凝灰岩

白色を呈する。加工痕の認められない長径13cmの破片である。構成礫種は松脂岩、軽石、流紋岩である。松脂岩は黒色や灰黒色を呈し、多い。粒径は15mmに及ぶ。細粒のものが多い。亜角礫が多く、角礫は僅かである。軽石は灰白色を呈し、稀に、赤褐色を呈する場合がある。粒径は15mmに及ぶ。角礫が多い。流紋岩は青灰色を呈し、僅かである。粒径は５mmに及ぶ。亜角礫である。稀に、深紅色の柘榴石の自然結晶を含むものもある。基質は白色を呈し、緻密で柔らかい。

流紋岩質火山礫凝灰岩は溶結講造が認められないことと、松脂岩、軽石、青灰色流紋岩礫からなり、白色を呈することから、大阪府太子町上ノ太子東北、牡丹洞付近に分布する下部ドンズルボー層の岩質に酷似する。(図21)

b．石英安山岩質火山礫凝灰岩

加工破片である。長さは30cmで長柱状である。三面は熱を受けて黒褐色に変質している。

暗灰色を呈し礫が多い。構成礫種は流紋岩、安山岩、石英である。流紋岩は灰白色を呈し僅かである。亜円礫から円礫で最大粒径は13mmである。安山岩は黒灰色、淡赤紫色、暗灰色を呈するものがある。いずれも角礫であり、多い。いずれの礫も玻璃質で結晶を認められる場合は少ない。粒径は22mmに及ぶ。石英は淡茶褐色透明で僅かである。粒径は５mmに及ぶ。周囲は溶融されたような円みがある。基質は僅かであり淡茶褐色を呈し、緻密で堅い。六角形板状の自形をなす黒色の黒雲母、周囲が溶融された淡茶褐色透明の石英が僅かに認められる。いずれの粒径も 1.5mm以下である。

石英安山岩質火山礫凝灰岩は周囲が溶融された石英、六角形板状の黒雲母を含むことから、寺山火山岩の岩相の一部に類似する。(図21)

(奥田尚)

奥田氏に、凝灰岩２点を鑑定していただいたが、基壇材として現位置を留めている凝灰岩は、全て流紋岩質火山礫凝灰岩であり、石英安山岩質火山礫凝灰岩は認められない。それゆえ、後者の長柱状加工品の使用箇所は見当がつかない。あるいは、補修材であるかもしれない。また、熱作用の原因は不明である。これらの凝灰岩を使用し、塔を創建するためには、かなり高度な技術、労働力が要求されたのであろう。

(安村)

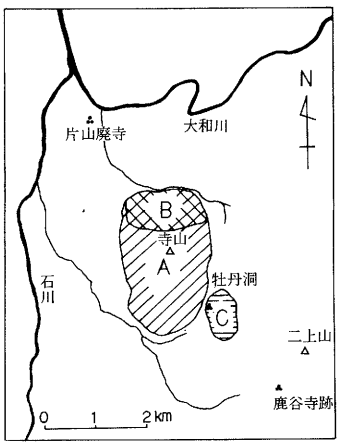


図21　凝灰岩石材の採石推定地

図　　版

基壇全景（南から）

西階段（南から）

基壇南辺瓦・凝灰岩出土状況（西から）

南階段（東から）

基壇南辺（南から）

基壇北西隔（東から）

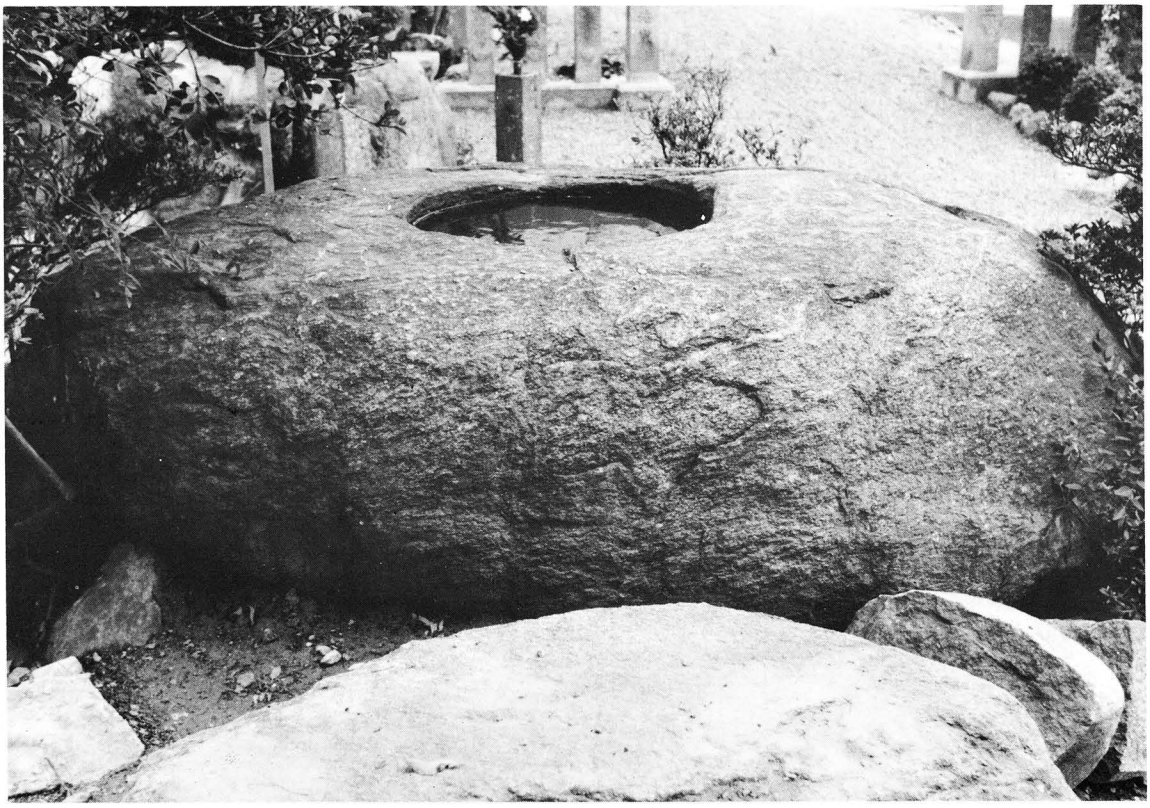
図版三　基壇(3)

南階段（南から）

南階段（西から）

図版四　礎石

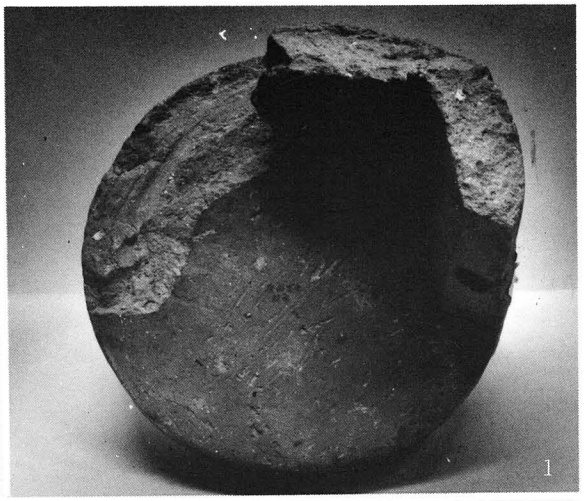
礎石（北から）



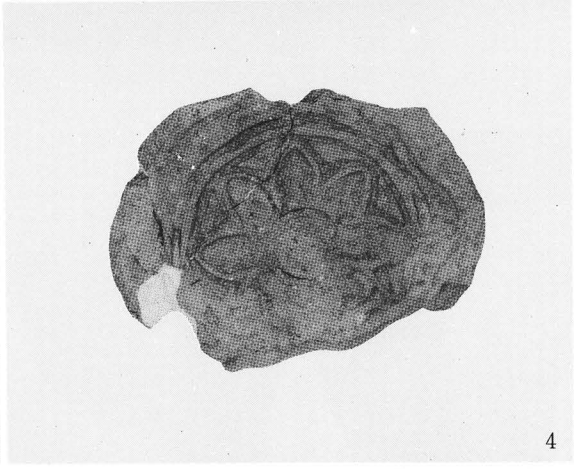
心礎（北から）

図版五　軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦

1


1

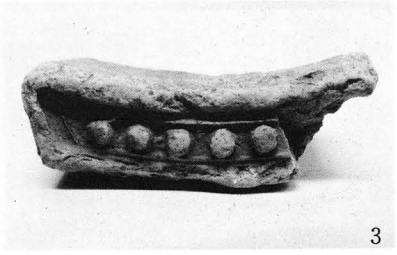
3


4

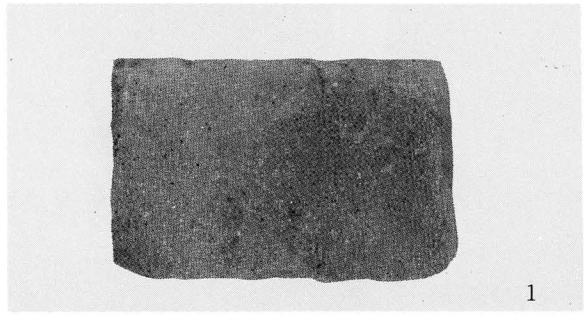
軒丸瓦　1：3

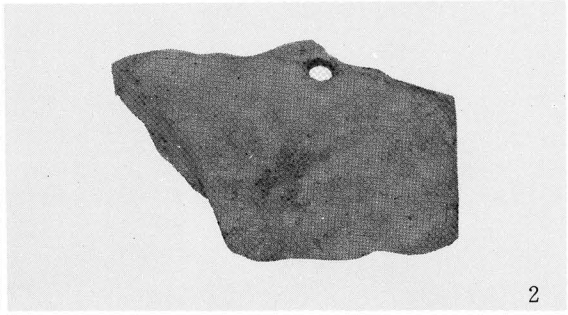
1

2


3

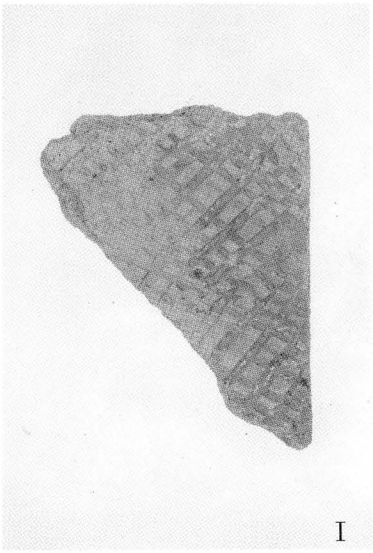
軒平瓦　1：3

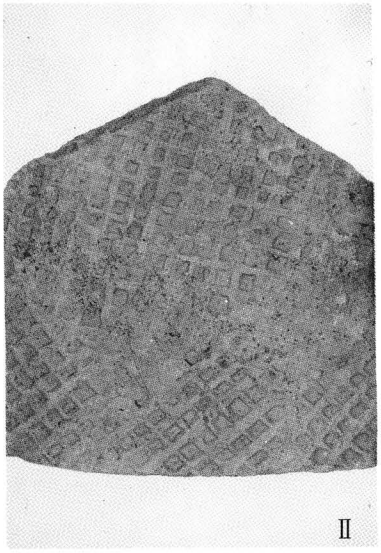

1

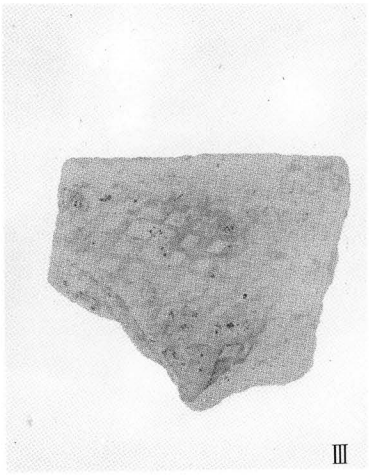

2

道具瓦　1：3

図版六　平瓦叩き目

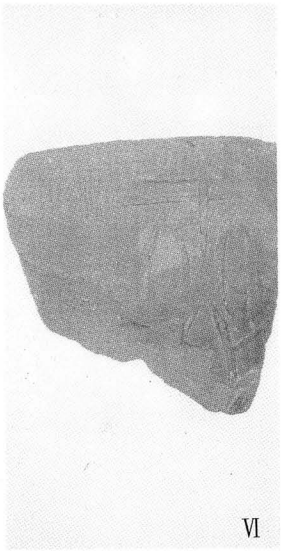

I


II

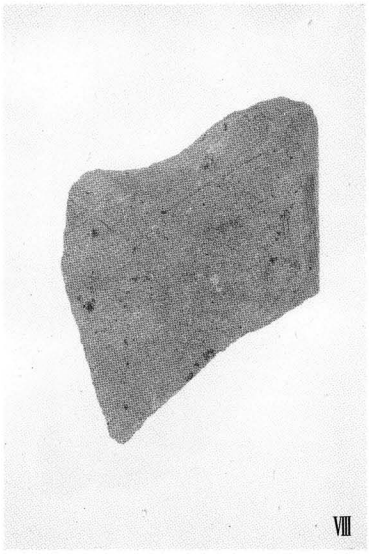

III

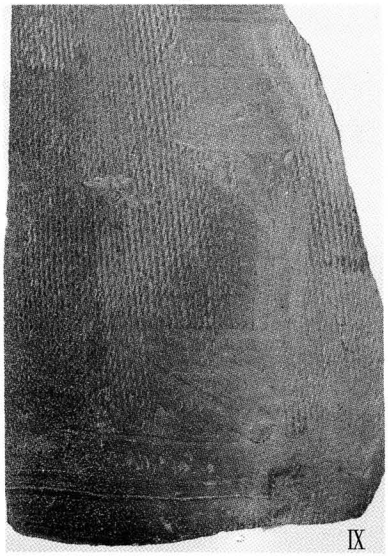
IV

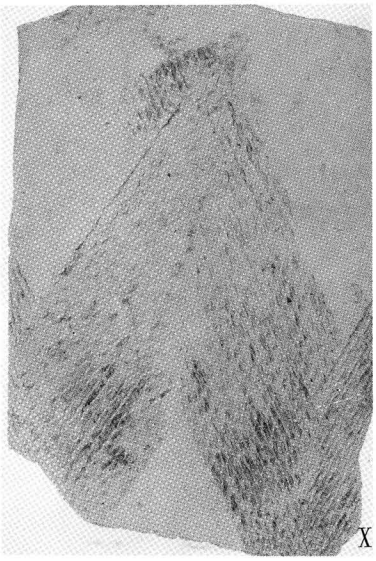
V


VI

VII


VIII


IX

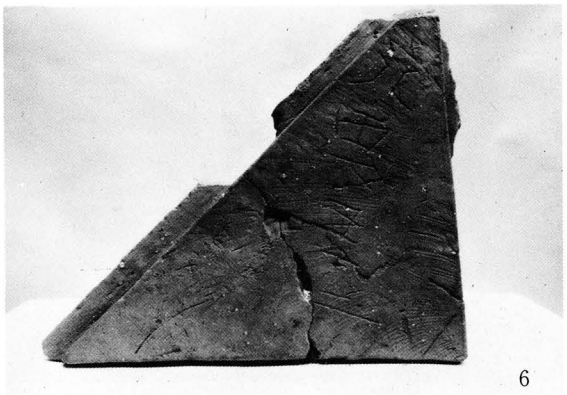

X

1：3

図版七　塼・土器・埴輪・鉄製品

1

3


6

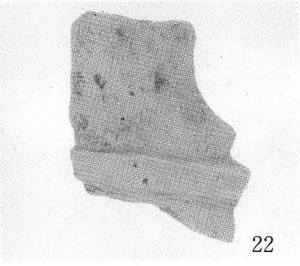
塼

5

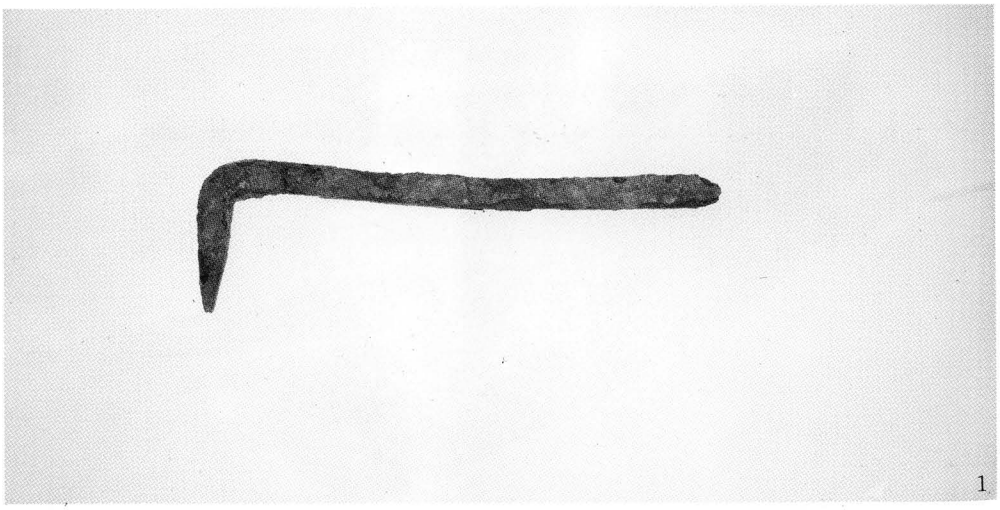
6

9

18


22

土器・埴輪


1

鉄製品

片山廃寺塔跡発掘調査概報

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
TEL（0729）72—1501　（内線716）
発行年月日　1983年3月31日
印　　刷　K.K 中島弘文堂印刷所